

横浜開港150周年記念

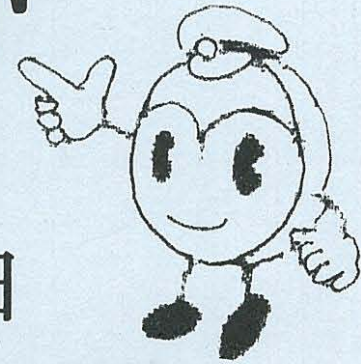
横浜市営地下鉄四号線開通記念

都筑の足跡

2008年3月30日開通

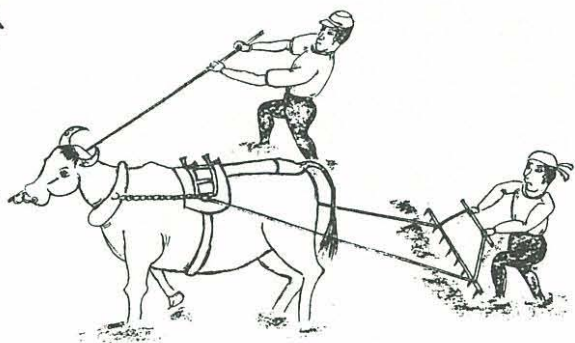
開通記念・3月29日

港北ニュータウン中川地区同志会



足跡を辿る

- 一 ・ 横浜開港百五十周年・地下鉄四号線開通
 - 二 ・ 港北ニュータウンは何故作られた？
 - 三 ・ 故郷改革
 - 四 ・ 港北ニュータウンの今昔
 - 五 ・ 家屋の移転
 - 六 ・ 厳しくも豊かな農村の暮らしがあった
 - 七 ・ 山田富士の思い出
 - 八 ・ 終戦の日
 - 九 ・ 故郷
 - 十一 ・ 出征
 - 十二 ・ 誰でも新住民
 - 十三 ・ 十人十色
 - 十四 ・ 孟宗竹
- 横浜開港百五十周年・横浜市営地下鉄四号線開通は、横浜市民としては二重の喜びです。区画整理が始まって四十年の歳月が流れ、故郷を知る人も少なくなりました。敗戦間際、小学校の先生も着任するとすぐ応召、覚えが悪く成績は中以下、誤字、乱文、重複記事が多く、纏まりありませんが、埋もれた故郷の生活の一部を記しました。四号線開通は新たな横浜の歴史の一ページです。後日ご笑読下さい。〔一部 小学校六年用にルビご容赦下さい〕



牛の代かき



平成二十年三月二十九日

男全富雄

横浜開港百五十年に地下鉄四号線が開通について

港北ニュータウン中川地区同志会

中川地区同志会の皆さん区画整理の約束でした、地下鉄四号線が開通により、港北ニュータウン計画が、実質的に収束の証になりました。横浜市元日本住宅公団、同志会の皆さん耐えた 四十年有難うございます。

一八五九年（安政六年六月二日）横浜開港から百五十周年の節目に横浜市営地下鉄四号線の開通を向かえ、皆さんとお祝いしたいと思えます。横浜開港から関東大震災で完滅、六十二年前 焼夷弾爆撃で、横浜は瓦礫と化し、戦後 横浜の復興は市民の努力であり感無量の思いです。

一九六五年横浜市六大事業（後記）の一つに港北ニュータウン開発と地下鉄の整備が計画されておりました。

港北ニュータウン 公団に土地四割買収、平均三割五歩 減歩が決まり、スタートしてから四十年経過してようやく地下鉄四号線（グリーンライン）が開通になり、時代の流れの変化とは言え、待ち遠しい四号線の開通でした。三号線（ブルーライン）は平成五年に開通、六号線（都営三田線）は昭和六十年七月に中止になりましたが、センター北止まりであった四号線を中山まで延長になりました。換地図に六号線北山田駅が記載されながら幻に消えました。区画整理は平等の負担、平等の恩恵を受けるのが原則です。要約 第一地区も 地下鉄四号線開通により遅くなりましたが、第二地区と同じ環境になり、地域の開発が進むようになりました。

ニュータウン計画もオイルショック等世相の変化で、事業計画の変更工事計画の変更、最近になり、公共用地の小学校用地が八箇所も住宅用地に転売されるのを見て、少子化と時代の変革を実感しています。

地下鉄四号線開通により、この間 区画整理にご指導戴いた地域の、多くの先輩は開通を待たず 黄泉の国へ旅立たれ、地権者も世代交代されて居られる家庭も多く、老いて地下鉄に乗れる自分の幸せを感じております。

整いつつある街を見て、緑道を散策するとき、故郷滅亡の激論の末、財産を犠牲にした同志の 協力のお陰と思いつながら万歩計と癒しております。又家屋、墓地移転等 当時 区画整理をお手伝いした者として 至らぬ事が多く、同志には大変迷惑をかけました。仕方がありません 故郷を捨てたのですから・・・でも、同志の皆さんの 故里に染み付いた 思い遣りが、 住み

よい街になりました、十人十色の方々と、新しい出会いもあり、ご指導戴き、支えてくれた友人知人同志は 人生の宝です。

造成では 横浜市関係職員 元 公団皆さんには大変お世話になり、ご指導いただいた方々数知れず 一人一人思い出の積み重ねがニュータウンの現状です。お勤めの方は、交代の度に気心がしれるまで、心配しましたが、引継ぎが完璧に行われ、事業が円滑に行われたと思います。中には再度転勤で港北に勤められた方もおられ親しみを感じます。

私ども仕事と家を失い、生活対策で土木会社を設立、農業は土作りと励んだ田畑を自らキャタピラで踏みつぶし、バックホウで草屋根を壊し、先祖に詫びながら墓地を掘り起こし惨めな仕事でしたが、喜怒哀楽 普通なら経験できない体験と、導き戴いた友人知人、人生の中で 掛け替えのない時間であり尊い幸せでした。

市の厳しい財政の中、近代的な総体にスマートなこじんまりした地下鉄四号線ですが、安全で効率よくニュータウンに、幸せを運んで来る事を期待します。

開通までの交通局関係者皆さんのご苦労は大変でしたでしょう。丁寧に気配りしながらの説明会、地域の要望を答えたいが、財政切り詰めの中模索しながらの知恵を絞り 素晴らしい地下鉄になりました。地下構造物の技術力と、余裕日数もない工期には 市は勿論 現場交通局作業所皆さん、現場作業員の皆さんに 心からご苦労さまと感謝いたします。

横浜市六大事業

- ① 中心市街地の活性化
- ② 金沢沖の埋立地・中心市街地の工場移転先と勤務する住宅地の確保
- ③ 港北ニュータウン：乱開発を防ぐための街づくり
- ④ 高速道路のネットワーク
- ⑤ 地下鉄の整備
- ⑥ ベイブリッジの建設

平成二十年 三月二十九日

誤字乱文多謝 男全富雄

港北ニュータウンは何故作られたか？

乱開発が始まったからです、では何故乱開発がはじまったか、相続対策です。家族制度が変わり、相続するには膨大な相続税を払わなければ相続できず、分割相続もあり、どうしても農地を売らなければ相続税が払えず、売却したり物納した土地に家が建ち始めました。また当時から農家の後継者不足も一因ありました。

農地の中に家が建ちますと、排水が小川を汚し田圃に入り稲作が出来なくなり、狭い農道に水道を引き、車の出入りが困難をきわめ、緊急車両が危険ではいれず、農道の補修工事が農民の奉仕でしたが、道に引く砂利も配給騒ぎになり、中原街道も勝田橋付近は何時も大渋滞、此の俣では住みぬくい街になってしまふと、当時中川連合町内会長金子保氏が発起人となり昭和四十年頃から港北ニュータウンの説明がありました。賛成反対の意見で集会が公民館で何回も開かれましたが、先祖伝来続いた農家を止める、とんでもないと最初は反対が多く、乱開発このままで良いのかと、議論の結果、区画整理に踏み切りました。農家が土地を手放すのは末代までの恥と、信念をもっておられるのが大半でしたので、切ない思いです。

四十四年四月 当時の日本住宅公団に造成費用として 土地四割を売却、公園道路等公共用地に 三割五歩の土地を 減歩として無償提供。鉄道は三号、四号、六号の三本が開通する条件で区画整理がはじまりました。

特に北山田地区は全部落が区画整理に入り、農家全員失業し、生活対策として有志十七名で土木会社を設立、十三名重機の免許を取得、ニュータウン造成工事で働きました。バックホウで草屋根を壊し、丹精こめた田畑をキヤタピラで踏み潰し、先祖が眠るお墓を掘り起こし、自らの手で故郷を壊す惨めな仕事でした。里は平均して十メートル埋まり、完全に故郷は永久に地球上からなくなりました。

鉄道三号線は既に営業しており、四号線が約束してから四十年経過して本年三月開通になります。既に街は形成しておりますが、約束の地下鉄開通により区画整理収束の証となります。六号線「都営三田線」は計画図には北山田駅が予定されておりましたが廃止になりました。

住居表示前は、南山田、北山田、東山田、勝田、大棚、牛久保、茅ヶ崎、中川、の八町が横浜市に合併前は中川村でした。合併後 中川連合町会となり会長として、港北ニュータウンを牽引してこられた、金子保氏には敬意を評します、「其の時歴史が動いた」人物と表したいと思えます。

誤字乱文多謝

故郷改革

農業を天職としている者は先祖伝来伝え守られた土地は命より大事と思つて居た。だから飢えに耐え、汗する事に誇りを持って土地を守ってきた。土地を離す事は、恥が先に立ち、先祖に申し訳なく、部落では怠け者の代名詞であつた。

昭和四十年頃よりニュータウンの話があつたが聞く耳持たぬ風潮であつた。其の頃、相続税で仕方なく土地を手放す傾向があり、田圃の中に埋め立てし、山を削りして住宅が建て始めた、排水で川が汚れ、稲作に影響が出始め、道路が狭く、何時も脱輪して車が落ちて、緊急車両の進入にも事欠く日々が続き、乱開発に部落で道路整備が大変な奉仕になつてきた。

其の頃昭和三八年東急開発により北山田の十代谷戸の一部に開発の話しがあり、現すみれが丘の開発が行われた。

一方農家では、消費地に近く川崎 横浜 東京 に近く夏野菜、冬野菜何でも良質な野菜栽培が出来る豊かな農村であり、農業を捨てる考へは微塵もなかつた。開発か拒否かで集落は二分され畑の土手道、田圃の畦道で、二人寄れば、お互い疑心不安で仕事そっちのけの不安の日々が続き、やがて山田富士の裾野にあつた公民館で賛成反対の激

論が続き、夜明けの一番鳥が鳴くまでの会合が何回かあった、反対派は賛成派に、明るい月夜ばかりではないぞと、脅かされたが、リヤカーか牛車しか通らぬ部落に三本の鉄道が入り、北山田に地下鉄四号線、六号線の二つの駅が昭和五十五年まで完成させる約束を信じて、賛否両論にわかれたが最後は多数決で日本住宅公団に、四割買収〔工事費捻出の為〕を応じる為に、滅多に使わぬ実印を先祖に詫びながら押印した。

集落の良い所は、激論交わしても、決まった事に対しては従う風潮があつたが、農一筋に生きて高齢者には理解し得ぬ決断だつたと思う。残つた土地三割五分を減歩〔無償提供、緑道公園等〕でとられ工事着工と同時に農家は失業に追い込まれた。

仮住居に立ち退きを迫られ、田圃約十メートル埋められ故郷は完全に地球上から滅亡した。故郷の言葉には、生きている限り、童謡に演歌に思い出と母の温もり、帰りたい、心の支えだつたが、ニュータウンにより故郷を失つた者があるが、新しい故郷が、時間がかかるが必ず出来ると信じている。

農家は失業して仕方なく十七名の同志で、土の匂いが忘れなく、土木会社を設立、十三名重機の免許資格をとり、自分の故郷を自分で壊す

惨めな日々が続いた。

何百年続いた農家の草屋根をバックホーで鷲掴みして壊す時、遠く離れた道で佇んで見ている老翁の姿、振り向く事は出来なかった。先祖伝来お世話になった井戸を埋めるには、感謝の気持ちで、神主のお払いを受け、井戸に空気抜きの竹筒を入れて静かに埋めた。

墓地も農家では、一家か個人墓地が多かった。墓地移転には、菩提寺の住職を頼み、お墓で閉眼式を行い、石屋に墓石の移動を新しく作った換地墓地に頼み、墓を掘り起こして骨を拾ったが、累々と骸骨を並べた様は異常としか思えぬ。掘り起こした骨を棺箱に納め火葬場で荼毘にして、六個の骨壺に納め新しい墓地に納骨して、再度住職の開眼式の読経で墓地移転が終わった。

墓地家屋の移転が終わった集落を重機を操り自分たちの職場だった田畑をキヤタピラで踏み潰すのは、仕事とは言え、惨めな思いだ。作業を終え事務所で明日の日程を見て、明日は何処を潰すのかと複雑な思だった。

故郷には姿に見えぬ暖かさが集落には漂っていた、医者としてない部落で主婦が野良の帰りに、子供が具合が悪いと隣の叔母さんと立話すると、寝静まった深夜そっと叔母さんが、戸を揺さぶり、容態はど

うか、この薬を飲ましてごらんと、薬を渡して闇に消えた

悪戯が過ぎると他人の叔父さんが、注意してくれ、古老が遊び道具を作る手伝いもしてくれた、時を忘れて遊んだ清水流れる小川、猿顔負けの柿の木の鬼ごっこ、木から落ちて接骨院にリヤカーに乗せられ姉妹に引かれて治療に通った。

故郷の思いでは、静寂の中 小堀からの流れる水の音、微かに遠く中山線の汽笛が遠のく、雑木林の土手は陽だまりの癒し、果てしない宇宙に吸い込まれそうな星空、露に濡れた稲田から湧き出るような幻想的なホタルの乱舞、満月がもつたいなくて 雨戸一枚開けて蚊帳の中から月を眺めて寝た思い出、鍵は不用で盗難は聴いた事なかった。お祝い事や不祝儀があると我が事のように心配し、喜んでくれた、草屋根の補修には何日でも奉仕してくれ、庇い合ってくれた故郷、あの暖かい、義理人情深い、心の故郷は埋めたくない。

区画整理の組織として港北ニュータウン住民協議会が住宅公団

横浜市 地権利者三者により組織され事業対策 生活対策 農業対

策の委員会か設立活動、会議が開かれ、工事の再再度の遅延で紛糾、市役所に抗議デモを行い、早期完了を迫ったが千九百六十九年買収から三十四年経過する、本年二千三年になっても約束の四号線は開通し

ません。

区画整理審議委員の選挙が始まり、前代見門の事態が発生した、土地を失った農家と、サラリーマン〔宅地会〕との激突が始まった、農家は組織での討論は経験浅く、勤め側は労働争議等 経験豊富で 完全に対決してしまつたが、問題は其処まで争う事ではなかつたが、団結を誇示する風潮が強かつた時代でありました。個人は良識ある方が多かつたが、組織の建前 頑張つておられたが、宅地会側からも自薦立候補があり定員超過で選挙になつてしまつた。農家側も部落のからの選考委員の外、委員立候補があり村中上げての選挙戦になつてしまつた。各地区選出した委員候補の家を選挙事務所にして毎日地権者十五名が交代で出勤 選挙対策に奔走されたが、近所の主婦が、炊き出しに数名毎日交代でこられた、市会議員 県会議員も陣中見舞いに駆けつけ大変な騒ぎになつてしまつた。北山田も二名の選考委員を出した為、部落を二つに区分けて投票を以てしたが、選考された委員には其々の親交交際があり、或る友人は区分けされて相手側に投票以来されたが、深夜そつと選考委員宅を訪れ激励して闇にきえたが、投票日が近づくと 各陣営の運動員が昼夜監視で辻に見張りを立てる騒ぎになり、親戚にもいられない常態が 選挙が終わるまで続いた。当時

の役員は辛い苦勞をした結果、選考委員全員当選した。サラリーマン側は組織を充分生かして一票も無駄なく配分 見事に全員当選した。区画整理の中で審議委員の厳しい選挙は初めてだそうです。地主地権者と宅地会と一時期対立した時もありましたが 個人的には友好的であり現在も続いております。

過去残念に思うのは、個人のことです。申し訳ないが、私十七歳で終戦、十四歳で同級生は海軍三名〔一名戦死〕 陸軍航空隊に二名少年兵として志願していた、徴兵検査は二十歳で行われたが、兵隊が不足十九歳で徴兵検査、十八歳に引き下がり、それでも不足で、終戦の春徴兵検査もしないで 十七歳で数名除いて同級生 大半が、本土決戦に備え防衛召集で都田小学校に入隊した。

北山田 八十二軒の農家から五十八名戦地に赴き、大戦だけで二十四名戦死され、戦後復員されても飢えに苦しみ 過酷な戦場からか後遺症か残念に 多くの復員兵は体調崩され他界された。

山田富士周辺は昭和十九年春の宵、b二九の焼夷弾爆撃で火の海になってしまった、低空をあざけるように飛ぶ爆撃機、あまりの数の多さに諦めと虚しさを感じた。狂ったように高田の高射砲六間が吼え、高射機関銃が映光弾を引きながら炸裂破片が田畑にブスブスと焼夷

弾の破片〔二四本結束が空中で飛散〕と落下、牛久保と東山田の照空隊陣地のサーチライトが飛行機を補足、敵機が落とす落下傘付の照明弾で真昼のよう、電波障害でアルミハクがサラサラとゆっくり無数に投下され、東山田の海軍倉庫が全焼、北山田では防ぎ切れず農家二戸全焼、夜空を焦がす紅蓮の火と、焦げる匂い 焼き尽くされる虚しさ 言葉に尽くせぬ地獄図だった。家族を防空壕に入れ、豪から出た途端、高田の高射砲が慌てて低空を撃ち私の耳元で風圧を感じた瞬間、真後ろの竹林で炸裂、九死に一生を得た。小学校の御真影〔天皇皇后の写真を入れる倉庫〕の警備は青年学校生徒数名が任務でしたが、部落が燃えあがっているのは、行かれなかった。

港北ニュータウンの過去を振り返ると、貧しくても、辛くても住みよい里だった。激動の八十年の生涯、青春を指導してくれた故人、体力の限界を味わった農作業を手助けしてくれた先輩、再生故郷を誓いあい汗を流した同志、年代が走馬灯のように回り懐かしく、老木になりながらも、まだ大勢の友人、知人に迷惑をかけています。

横浜開港百五十年、戦後六十有余年の過去も加わり、市民一人々の喜怒哀楽の生活の積み重ねが歴史であり、地下鉄四号線の開通を祝える時に、居合わせた運命を感謝しています。

港北ニュータウンの今昔

山田富士を中心に稲田と丘陵きやうりやうに囲まれた静かな農村

草葺屋根くさぎきやねの周りには必ず防風林ぼうふうりんと柿の大木があつた

農道と稲田の間には雑木林ぞうまきはやしから染み出る清水の小川が流れ

子供の遊び相手の泥鰌どじょう蛙かえるが六月ホタルと同居どうきよしていた

歳を重ねる門松 桃から桜へ花の季節きせつ蜜蜂みつばちに自然を学び

藁帽子わらぼうしも焦げる炎天下えんてんかの草取り 落日らくじつに追われる収穫しゆうかくの秋

四季折々しきおりおり変わる秋の空、ひんやりと亡き面影おもかげを満月に求める

静寂な夜中 遠くの砂利道を牛車の軋きしむ音、寝ずに働く農夫を月が導みちびく

農家は朝明けいちばんにわじり一番鶏あさつゆで朝露を踏み、夜星で家路につく

奥まった暗い 囲炉裏いろりから鍋なべの匂においと主婦しゆふの手拭てぬぐいが忙しく動く

嫁よめと言う言葉に 暮らしを背負せおい 我慢と忍耐で家に尽くす農婦のうご

貧まずしくて 辛つらくても 染み付いた母の匂においは故郷こきやうの匂におい

隣は遠いが、忙しくても オーイの一声で振り向ふいてくれる 思い遣り

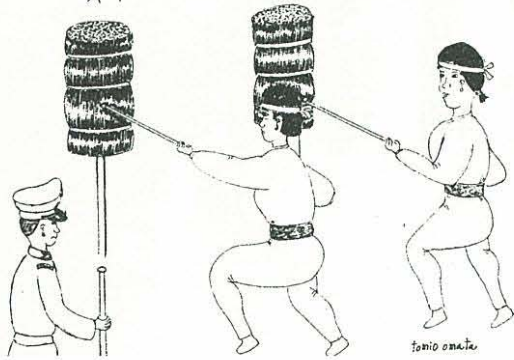
谷戸やとが家族 子供の躰しつけは内外なく 他人たにんに褒ほめられ 叱しかられ

大自然だいしぜんが遊び場 杉林で花粉を竿で叩たたいて洗濯を増やし

不思議ふしぎと耕作中の田畑には入らなかつた 村中が子供を育てた

学校から帰ると 腕白小僧わんぱくこぞうは 手伝てつだいいの合間に戦争せんそうごっこ

青年学校女子部銃剣術訓練



女の子は手伝いの合間に子守しながら 柿の葉で ままごと遊び

ドングリと小石で 指で弾いてキシヤゴ遊び

鬼ごっこで 柿の木から落ちて接骨院通い 忙しいと叱られ

自転車は高級車で 一戸に一台中々買えなかった

大事な自転車を持ち出して横乗りの練習 ハンドルを壊して大目玉

学校から帰り 手桶を引きずりながら 井戸からお風呂の水汲み

やっと沸かしたお風呂も 歳の順番で ぬるま湯につかる

夕飯支度できても 夜なべ仕事か 来客があれば食べられない

空腹抱えてじっと我慢 親父より先に 箸はもてない

農繁期は 宿題より 提灯点けて農作業手伝いが優先

不満顔すれば 口聴かぬ親父の眼が恐ろしく 従うすべなし

母が小声で 宿題あるんだろう もういいよ 母の温もり

子供を家に還して遅く迄 母は 提灯の下で働いていた

寝静まった夜半一人 針仕事をする母の背中丸かった

昼間 隣の畑で立ち話の母 次男坊が胃を壊してと

深夜隣のおばさんが そっと裏木戸を叩いて 子供の具合はどうだと

煎じ薬を そっと渡して 暗闇の竹藪の中を去っていった

豪雪の中 子供が居ないのに、通学道の 雪かきをする老爺

屋根変えの萱を 夜中雪が降り出し 濡れてはならぬと

菅傘を被り 手伝いに来てくれた 隣の叔父さん

夜なべ仕事を手伝っていた新屋の叔父さんに、役場の吏員が遠慮がちに

召集令状をお目出とう御座いますと渡し自転車が消えた

親父が 母親が心配するから 直ぐ帰るよう進めたが 腰を上げなかった

戦況悪く最後と思つてか 家族を頼むと迎えにきた母親と 深夜闇に消えた

灯火管制で星 以外深の闇 空襲のサイレンが今夜も悲鳴のように聞こえた

又かとラジオを叩いてご機嫌をとる 死の悲壮感はただよっていた

防諜の為、二十年の五月出征兵士は深夜に密かに入隊せよ、付き添いは一名、

終戦間際 壮行会は禁止、暗闇の中小声で母親に行つて来ますと敬礼

昼間 東横線は機銃掃射を警戒して間引き運転

夜灯火管制で無灯火で走る電車 誰も異常と思わぬ世情だった、

出征は現代の 命をかけた単身赴任 行く者は生きて帰れぬ覚悟

日本を家族を守ろうと銃を握り、半分戦死 復員兵 体調悪く大半天国へ

命令 により国の為 命を提げた犠牲により 今日消費天国がある

ニュータウン知らない亡き先輩 命の尊さを生きているから実感

建てつけの悪い雨戸、薄暗い土間だったが心は明るかった

草屋根の下は暖かい温もりが漂っていたのが故郷

世相も時代も変り 昔の都筑郡から都筑区に名前が変り

環境は変わったが 住み好い町の思いはかわらず

物がなく辛抱と貧乏が 思い遣りで支えてくれた 過去妬みがない

物が豊富で 期限切れで なんでも使い捨て時代 僻みがある

統制で国のために民俗のためにが 自由で自分の為にと変った

人間孤独では生きられない 生まれて死ぬまで他人のお世話になる

生まれて、成人、結婚、皆さんに祝福され、最後は告別のお別れ

その間家族に育てられ 先生に教えられ 先輩に導かれ

土木 建築 ガス 水道 作業員に家を建ててもらい 雨露しのぎ

農家に食べ物を作って 生きる基を授かり 電気を作り送って貰い

撮影要員のお陰で 世界の情報が見られ、車を作ってくれるから乗れる

身の安全を 法と秩序で守ってくれる人が居るから 平和で居られる

植物の同化作用のお陰で 空気も吸える 人間一人では生きられぬ

十人十色の支えと思いがあから 己が育ち住みよい町が作られる

他人からの恵みを、思い遣りで返し、人は成長する

豊かさは「有難う」の言葉を忘れぬ事が 心の豊かさ

都筑郡から 港北区から都筑区へ戻らぬ歴史を刻み続ける

「家屋の移転」

ご先祖様に申し訳ない 解体する家屋から遠く離れて老爺の独り言

草屋根を驚つかみしたバックホーから煤けた埃が昇天した

埃をかぶったヘルメットを被った作業員のやるせない顔

代々の生活の思い出を蓄え、屋敷林に守られた我が家

お爺さん お婆さんの孫最良、親父の威厳が宿る

お袋の割烹着と手拭が汗に染みた愛、家に奉仕した嫁

妻子を残し赤紙で召集され、祖父母が遺骨を迎えた居間

降りかかる焼夷弾を屋根に上り 火はたきで防いだ草屋根

擦り減り、建付けの悪い障子 風雪に耐え木目が出た戸袋

代々 踏み固められた凸凹になった薄暗い土間

男は朝露夜星の農作業、疲れた主婦はお針の夜鍋

家族の温もりは疲れを癒し だが嫁いだ実家は消えた

隣近所の 思い遣りも 柿の木も 家と共に消えるかと

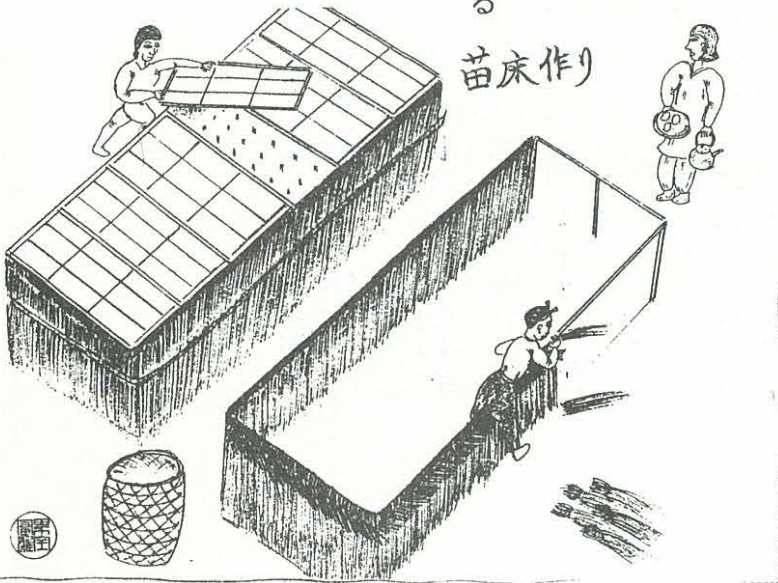
老爺は 生活の過去を 解体の埃の中に 探している

黒光りの大黒柱の役目は 区画整理で終わった

ご苦労様 俺の代で壊すかと 握り閉めた手拭が濡れている

夕暮れ 遠ざかる老爺の背中 は寂しく丸かった

苗床作り



「厳しくも豊かな農村の暮らしがあった」

お金もない 品物もない 貧しい暮らしだったが、暮らしよかった。なぜ 思い遣りがあったから、畑仕事が遅れて草が出て困っていると黙ってむしってくれ、農道で車が脱輪すると、自分の作業を捨てて車を脱してくれ、子供が容態が悪いと夜中、そつと裏木戸から手製の煎じ薬を母親に手渡し、大事になあ と闇に消えた隣の叔母さん、学校へ行く農道の険しい崖下の農家の叔父さんが必ず子供が通うのを待っていてくれ、子供等は大声で、今何時 と呼びかけるのが習慣になつてしまい、叔父さんが居ない時は、叔母さんが大声で答えてくれた、「今8時だよ、急いで行きな」其の叔父さん達が、原の農道の傍の畑で仕事をしている、学校帰り「只今」というと、「遊んでいないで早くお帰り」優しい言葉の中で子供は育つた、村中が家族で子供は育つた。

草葺屋根の吹き替え、冠婚葬祭、人手が足りない時は進んで手伝いあった、労働の単価は問題外、手伝いで自分の仕事が遅れると、夜鍋仕事、朝飯前の仕事で補つていました。労働時間は関係ない時代でしたから、恐らく農家の労働時間は十六時間は越えていました、労働が利益を生むのは変わりませんが、自分の経営だから、体を酷使してしまいます。

農作業は厳しかったが、辛いとは思はなかった、過酷な労働だが、与えられた使命と思つていた、誰にも指図されず自分の本能の俥に仕事ができ、種蒔も収穫も雑木林の四季の教えを守っていれば、でき贅沢な職業だと思う。自然な中で生きるくらい幸せなことはない、現代は教育が文化が進み幸せな世相になりましたが、思い遣りが消え、妬み、僻み、恨みが増えているようにみえます。

「戦争が暮らしを変えた」

戦前は日用品は統制の暮らしだった。衣料品は配給キップ性だったが品物がなかった、たまにある布がスフで洗うと切れてしまう代物だった。煙草はモチグサ松葉を乾燥して紙にまいて内緒で吸ったが、松葉は苦かった。戦前は命令の社会でした、発言の自由は絶対なく、お上に従う以外なかった。男は兵隊に行くのが当然、兵役に就かぬ男は部落で肩身が狭い思いをした。軍国の国であり、統制国家でした。

戦前は政府に主な米、麦、サツマイモは共出買い上げられていました、品物が無いが、お金もない、終戦間際の生活は 自活でお金には縁がなく、農村は完全な人手不足、それに動けるものは 勤労奉仕に借り出され、合間に警戒警報、空襲警報、生産が落ちるのは当たり前、夫の留守を預かる主婦は 想像を超えた苦勞をした。

一番変わったのが、戦死しなくてよくなった、「戦死者に申し分けない気持ち」自由になった、平等になった、急に自由になったので、真の自由の責任を忘れ、

我儂な自由に思える事もある。眞の自由は責任を伴ったのが自由であり、戦後履き違えた何でも自由なんだ、の氣質の者も居る、戦前戦後の経験者は、八月十五日を境に国が変わり経験した事がない、自由に戸惑った。人権尊重で自己主義が多くなってきた。

軍隊に行かなくてもよくなった事は良いが、目的を失ってしまった。新生日本を作ろうと復員兵を柱に、富士会を結成、まず堆肥づくりに養豚を初め用途、貴重品だった米糠を会員から集めて俵に摘め、馬車に載せて、相模原まで子豚の買い付けに五人で行き、約十五表の米糠を提供したが、子豚五頭しか確保できなかった、米糠も子豚も貴重品だった。農家は自家用に鶏をたいてい飼育していた、卵十個くらい親鳥に抱かせて孵化させてふやした。大規模養鶏の基礎はできていた。羊を飼育して毛を繊維工場におくり、毛織物を作つて衣服を作るのを農協が斡旋した。山羊を飼育、乳を搾り栄養元にした。二七年二月初めて乳牛を購入それから一日も休みが無い生活が始まつてしまった。過酷なんではない。朝四時に牛小屋に入り、掃除、搾乳、給餌、六時に乳の出荷、東京馬込までモヤシの不良品を餌に毎日取りにいき、八時に帰宅、荷をおろして朝飯、畑仕事え、十一時半、草刈、牛小屋の掃除、給餌、搾乳午後一時に終わり、食事、終わつてすぐ農作業、六時牛小屋、掃除、給餌、搾乳、明日の餌の確保、夕食は十時、風呂に入り休むのは早くて十一時、環境破壊で酪農を辞めたのは人生が変わつた思いです。椎茸栽培に切り替え、栃木、山梨方面から原木を購入椎茸栽培を初め一年収穫出切る菌糸を植付け、三年越しに収穫がはじまつた。

富士会の応援で、戦後富士若青年会が組織され、文化活動、体育に活躍特に運動は活発だった。中川連合の運動会は優勝が多かつた、駅伝は中川駅伝、港北駅伝、横浜駅伝に参加、練習は仕事が終わる夜、山田富士から綱島橋の欄干にタッチしてくる練習でしたが、誰も見ていないのに必ずタッチしてくるとライバルの青年会員が見て感心していた、娯楽がなかつたが根性があつた。山田富士の庭でバスケット、バレーも盛んに行われ、バスケットは富士通信のバスケット部と親善試合をした。

「造成」

昭和四四年四月 開発で部落存亡の危機で混乱、当然です先祖伝来守ってきた農地を捨て、命より大事にしてきた土地を手放すことは、僥びなかつた。何が決断させたか、思い遣りと連帯感と思う、人様に迷惑かけては、里に染み付いた思い遣りが移転を可能にした。造成を可能にしたのは、役員は当然だが黙して語らず、黙々として 協力してくれた地権者のお陰です。

一変苦勞して育てた、椎茸を石油をかけて焼却した。農地がなくなり同志十七名で土木会社を設立、重機の免許を取り、土木と造園の施工管理士の資格を取得、草屋根を壊し、お墓を掘り、雑木林を伐採、生活基盤の田畑をキヤタピラで踏み

潰し、生活の為に故郷を壊した、惨めな仕事だった。

足跡を振り返り 八十年間何が一番印象に残るかと訪われれば、最愛の妻に先立たれた事、か細い体で農家の辛い嫁をやり遂げ、樂にしてやろうと思つた途端ヨミの国に旅立ち、悔やみだけが残りしました。

故郷が立派な街になり、地下鉄の開通は、何よりも嬉しい、造成で移転しても、里の 思い遣りが友人知人に健在であり、老いて何かと今まで以上にお世話になつております。

4号線が開通は、世代交代した方もおられますが、資産を減らして協力した同志、造成で苦勞した亡き先輩のお陰です。

一九九六年公式見解では ニュータウンは完了となつておりますが、土地買収の約束は鉄道三本開通の説明により、農民はリヤカーか牛車しか通らる農道に地下鉄の駅が二つも出来ることを信じ、里を捨てて四十年 ようやく一番電車が走ります。

故郷の過去を知る人は少なくなりました、当然です昨日は過去で消えていきます、未来は新しい創造が生まれますが、何回も真坂の坂を越えるのが人生です。

食べ物が無い 暮らしの 経験をする、正味期限で捨てる生活は、衛生上は分かりませんが、満ち足りた暮らしに思えます、上を見て暮らすのは生活向上に大事ですが、たまには 生活の下を見るのも大事です。自分の暮らしがわかります。

「私の好きな詩を借用します」

ボウフラや 蚊になるまでの 浮き沈み



昭和三年修復された倶楽部
昔は太子堂とも言われていた



昭和三年公民館建てかえる
平成三年十二月十八日解体

山田富士〔思い出〕

山田富士は北山田の中心にあり、地域の大黒柱的存在でした。多摩川から南に七富士〔溝口、山田、菊名、中山、川和、荏田、??、〕あつたと伝えられております、起源は定かではありませんが、既に江戸時代信仰禁止令により富士講が禁止された記事があります。

山田富士は長泉寺の寺領でした、麓に草葺の太子堂があり、お坊さんがおられ、娯楽とてない時代、村の若者が夜太子堂を訪ね囲炉裏を囲んで知識を広めた、だんだん数が増していつしか若者の集会所となり、村の戸主会も集会に使い始め、正式に寺から村が富士山全部借用いたしました。年貢米を農家の耕作反別によりお米を集めて俵に積めて寺に収めました。割り当ては確か一反お米一合だったと思います、戦後も続き私も青年会でお米を集めて太子堂の庭で俵に詰めて仲間とリヤカーで寺に運んだ経験があります。

毎年七月一日朝五時に村中総出で富士山の草刈をしました、村からの連絡もなく昔から延延と草刈が公団に移管されるまで続いておりました、当日朝遅刻すると気まりが悪く崖の足場の悪い場所です、汗を流した物でした、毎年マムシが捕獲されておりました。刈る場所も富士を北から十代谷戸 しんなし谷戸 稲荷谷戸 芝生谷戸と

決められており、草の片づけは青年会の仕事でした。

七月下旬に 大山代参と雨乞い行事が行われており 現在も代参は続いております。毎年 農家の代表七 八名が代参当番で大山神社に参拝して 五穀豊穰と家内安全を祈願、御神酒と水を頂き 持ち帰り、翌日 村中太子堂に集まり、代参報告が行われた、まず持ち帰ったお水を桶に入れて、井戸から汲み上げた水で桶一杯に増やして、天秤で二人で担ぎ 山田富士の頂上に数人で ロッコンショウジョウを歌いながら上り、桶の中に笹を浸してサンゲサンゲと濡れた笹を振り 雨のイメージし「雨乞い」を行い、桶を太子堂まで担ぎ下ろして、今度は二つの大桶に水を入れて増やし、部落二つに分かれてバケツで水を掛合い 雨乞い行事 をして後、御神酒を注いだお神酒を振舞い、代参と雨乞い 行事は終わった。

四月八日は お釈迦様の誕生日、桜の開花と並び盛大でした。大釜で甘サケを沸かして振舞った、甘い物は中々口に入らぬ時代だったので子供は学校から帰り、富士山に駆けつけ、甘酒をお変わりして満足していた。

桜の満開日には近隣から多くの桜見物が見えられた。綱島の芸者さんが、ヨシズの座敷で、三味線を弾いて騒いでいるのを、遠くで

見ていた。家に遅く帰り子供は何時待でも見ているのではないと叱られた。五月は近隣の学校の遠足の場所だった。太子堂横に小さな運動場があり、戦後青年会によく利用されていた、富士通とのバスケットの試合、中川町とのバレーの試合 裸電球の下 暗くてよく怪我をしたが、太子堂は青春の思い出であった。

話題が前後になるが、終戦間際は悲惨だった、次々召集される先輩の送別会、食糧難で太子堂の中で行われた送別のご馳走は、お皿の代わりにした新聞紙に 薩摩芋輪切りにした二切れだけ、灯火管制の黒い布をかぶした薄暗い電球の下、輪切りの芋の傍に 女子青年が、想いを込めて丹精してつくった芋のチャキンシボリが 故郷最後のご馳走だった。

当時の若者は、国の為に命を捧げるのは当たり前と信じていた。出征は死を意味するもので、征くも送るも、今生の別れと覚悟していた。入隊する前夜、征く先輩から、想い残すことはない、お前も区切りをつけて後から来い、先に征くぞと分かれたが、国敗れて私は今生きている。

送別会の翌日 太子堂庭で 村中総出で出征兵士の壮行会、村境まで、後輩青年団が、「勝って来るぞと勇ましく」軍歌に送られた。同

じ道を、遺骨迎えと交互では、征く兵士は悲壮になる。

終戦間際、防諜の為 壮行会と集会は禁止され、出征兵士の見送りは同行者一名、深夜 密かに入隊せよとの通達があり、私の従弟は、付添いと二人で 食べる物が無い時なので、おにぎりを風呂敷に音がせぬよう裸足足袋で、母親に小声で行ってきます と闇に消えた 出征は 深夜 異常な雰囲気であり 悲壮感があつた。

青年学校〔軍事訓練校〕 山田富士は何よりも大事な演習場だった、生徒は周りの田圃に散開して 匍匐前進 銃を両手で支えて 腹ばいになって肘と膝で前進、泥だらけになって頂上目指して 最後は着剣して急勾配を突撃、青春の汗を燃やして頂上から、見下ろした田圃 風景は、今はない。

昭和十三年「紀元二千六百年記念事業」として 山田富士頂上付近に 枝ぶりの良い赤松の大木が二本あつたが、天皇陛下が毎年行われる 近衛師団を 白馬に跨り観閲 閱兵するバックの松として青年団の奉仕で皇居前広場に移植されました。

私は六十年ぶりに一昨年、久しぶり後輩と皇居を訪ね 二重橋前の公園で、赤松をさがしたが、公園がすっかり整備され、探しましたが見つかりませんでした。後輩の父が 赤松の移植の奉仕に 青年

団でされたと亡くなられた後輩の父から聞きました。

戦後 新生日本を築こうと 復員兵を中心に太子堂で夜青年会の会議をしていた、会議の途中 屋外に出たら、暗い桜の木の下に復員兵が立っていた。先輩が、お帰りなさいと声をかけたら、戦争中私が遺影写真を奉じて 告別式を行った戦死した兵隊さんなので吃驚した。話を聞くと、玉砕した硫黄島で 終戦も知らず洞窟に潜んでいたと話された。米軍二世が 小船で洞窟付近まできて、戦争は終わった 早く故郷に帰れと投降を呼びかけたが、日本の降伏は信じず、何時か援軍が来ると思ったが、爆音もなく 静かなので、洞窟を出て 終戦を知ったそうです。丁度弟さんが先に復員して会議に同席しておられ、急いで 母親を呼び 深夜 親兄弟共 壮行会で送られた同じ太子堂の庭で 親子の対面、復員兵は 横浜が全滅したと聞き横須賀に上陸、心配で復員手続きせぬまま、綱島から歩いてきたと聞き、親兄弟 家も無事を確認できたら、今夜の内に横須賀に帰り、復員手続き終えて、除隊するよう説得 自転車で綱島まで数人で送っていった。数日して復員兵は 寺墓地から自分の墓標を担いで帰り私宅の垣根に 墓標を立てかけて立ち寄り、硫黄島の生き延びた壮絶な様子を語ってくれた。洞窟の中は暗く 戦友の死体が腐乱してウジムシが湧き、

食べるものがなく、雨水をすすり、ウジムシを食べ命をつないだ、日本は絶対に負けない、必ず援軍がくると信じていたが、砲声も爆音も聞こえず、洞窟の前を小船で米軍の二世らしき兵士が、もう戦争は終わった、皆国へ帰った、早く出て来て帰りなさいとマイクで呼びかけるので、恐る恐る洞窟から這い出し助けられた、死んだ戦友に申し訳ないと涙ぐんでおられた、生きている幸せがどんな大事故か、復員兵は「父が訓練指導員だったので」報告にたちよられた。生きて涙の親子の再会は山田富士の忘れえぬ思い出であった。今は建物も太子堂の庭も消え、終戦当時を知る人も消えつつあります。富士若青年会で娯楽として何もない時代、幾夜も練習して素人芝居を行い敬老会を開き、老人を招待して喜ばれた。深夜になっても折角練習したのだと律儀な老人は幕が下りるまで席をたたなかつた。ニュータウン前までは町会が管理していたので手入れが行き届いていたが、公団管理になってから仏像碑文等多くが盗難されてしまった、横浜市に移管される条件として、山田富士にある地蔵等は公園には置けないので撤去するよう要請された、先祖代々受け継がれてきた子育て地蔵等の撤去は断じて呑めないと北部公園事務所と論争、市としては信仰対象の物件は公園には置けないと法律を

建てに譲らず、里を埋めた住民とすれば、せめて山田のシンボルは守りたい、最後は現場でお祭りは一切しない誓約書を町会長か書けば現在地に認める事で落着した。地域とすれば愛着と思いの詰まった山田富士を見守りたい。

山田富士裾野に工事用道路を山田富士組「失業した農家の生活対策の土木会社」が補修中、裾野に子供の頃乗って良く遊んだ松のしだれた大木があった、古老の言い伝えによれば、昔太子堂に訪ねてきた、お坊さんが亡くなられ、近所の人が、松の大木の下に懇ろに葬ったと聞かされておりました。この言伝えは若い社員は誰もしりません、私も忘れていました、工事用道路の補修のために、バツクホーウで既に切り倒した松の下を掘り返しておりましたら、土砂と一緒に骸骨が転がり出て、作業員は吃驚、富士組事務所に連絡があり私が現場に急行、現地を確認したら、言伝えの松の場所と一致、すぐに公団に連絡、公団補償課の指示により、長泉寺のお坊さんに現場で供養して戴き寺墓地に埋葬しました。現場を調べましたら、炭を敷き詰めた上に多少の骨とキセルの金部分、薬入れらしき入れ物がありました、古老の言伝えが造成工事で確認されました。其の場所は工事用道路だが事故が多く、現場で供養してから事故は

おきておりません。

山田富士は長泉寺の寺領だったので、謎めいた言伝えがありま山田神社も妙見山の山号のように寺領でした、御神体の一部が北の方向の寺山の地下六尺に埋めたと伝説があり、武蔵風土記にも同じ事が記されており、古い山田富士の地図に墓地の記しがあり探しましたが、判りませんでした。この伝説は、私が若い頃、旅で同室した時、大棚の大工さんから、お前のお爺さんから、代々伝えられた話だ、お前に何時か伝えたかった、俺は責任を果たしたと言われたが、造成前謎めいた伝説だが私は記事にして伝えたい。

徳川から明治、大正、昭和、平成と山田を見つめてきた山田富士を住んでいる人が守らねば、先代に申し訳ない。

市の公園に指定されてから、頂上付近まで植樹され樹が大きくなり富士山の形が見えなくなり残念です、二十数基あった仏像等は盗難にあい、現在数基しか見当たりません。地域が管理していた頃は、景観を重視して頂上には植えず、富士の容姿が見事でした。

山田富士の姿を元に戻す努力が必要です、緑を伐採すると自然破壊と言われますが、ニュータウンは緑を伐採して街が作られました。景観を保ちながら緑の歴史ある山田富士を守りたい。

終戦の日

暑い太陽が照りつける日だった、今日は大事な放送があると聴いた。何だろう
又大本営の決起の放送があるのだろうかと思っていた。私はランニングシャツに
継接ぎだらけの乗馬ズボンに巻脚絆〔足に巻く長い布〕裸足だった。農作業
は勿論、砂利道も裸足だったので、足の裏は余程の物でなければ刺されなかつ
た、物資の不足で穴の開いた地下足袋は、貴重品だったので履かず殆ど裸足の
生活でした。女性はモンペに名札を縫い付けた上着と、手拭を被り、防空ズキ
ンを何時も携帯していた、洗濯石鹸がなく、衣服の補充は家族構成により衣料
切符の配給制だが品物がなく、時折配給されても不良品でした。婦人は身だ
しなみに気を使うと、贅沢は敵だと言われ、出征した家族は、家を守り、農作
業の先頭に立ち、身を粉にしてはたらいいた。父は中川警防団長をしていたので、
8月15日朝から、在郷軍人会と駐在所へ出かけて帰ってこない。警戒警報、
空襲警報の重苦しいサイレンが鳴らず、紺碧な空に爆音一つしないのはかえ
って不気味だった。正午雑音で聞き取れにくいラジオから、初めて天皇陛下の
声を聞いた、「朕思うに」独特の声の勅語なので敗戦は、緊張したアナウンサ
ーの放送で漸く判った。信じがたいが、戦争が本当に終わったのかなと思い、仕事
は手につかない、私は一人山田富士の西北山田を見下ろせる丘の畑に立ち
杳然と敗戦の故郷を見ていた。走馬灯のように、過去が蘇り、目の前の山田
富士の倶楽部の庭で出征する多くの先輩を軍歌を歌って村境まで送った事、

無言で帰還した白木の箱を網島駅まで迎えた事、戦地に取り残された先輩はど
うなるのかな、思いめぐらしていた。ラジオは平静を呼びかけていたが、報道
管制が急になくなって、放送も戸惑っているようだった。懸命に軍の決起を抑
える為、天皇陛下の決断を守れと呼びかけていたが、軍首脳の割腹自殺、拳銃
自殺、皇居前広場で青年将校の割腹自殺を連日新聞は伝えていた。特攻基地で
は部下を失った上官が、生きて帰れぬと制止を振り切って飛び立ち 帰らぬ飛
行機があつたようです。15日夜 自然と倶楽部に青年が集まり、負けてたまる
かと、猛烈な銃剣術に火花を散らして鬱憤を晴らした、勢いあまって木銃で
障子を天井を突き破り若者は、大荒れに荒れた。倶楽部からの帰り、夜は久し
ぶりに灯火管制の解除で明るい電灯がともされ、静かな月を見て負けたくやし
さと、目標を失った不安が交差して反面、俺死ななくつていいんだと密かに
思った。父は半生を軍と生きてきた感情の整理に戸惑っているようであつた。
進駐軍が来てどうなるか、流言蜚語が入り乱れたが、誰も真相はわからない。
終戦から3日後、長野山中の地下に大本営を構築中の陸軍士官〔東山田、元父
の後輩〕が、長野から軍刀を引提げ、髭茫茫々として、目は血走り、台所の縁側
に軍刀を杖に腰掛け、先輩 日本が負けていいのか、戦死した者に申し訳ない、
関東軍は決起する気は無いのか、我々は天皇陛下を長野に迎え徹底的に戦う、
と迫つた。士官の興奮が収まるのを待つて、父が、俺だつて教えた若者が戦死、

辛いつらが、お前は天皇陛下へいたい下の兵隊へいたいだろう、陛下へいたいが耐えたがたきを耐え、新しい日本
を作れと言われている、お前は天皇陛下めいれい下の命令きが聴けんのか、と説得とうじてん、当時とうじ天皇
陛下へいかとの言葉ことばは軍隊ぐんたいでは威厳いげん絶対ぜったい的てきの支配しはい力があつた。国を思う仕官うしろの帰る
姿すがたは寂さびしく哀あわれに60年まふた過ぎても暇まがたに焼やきついている。

最近ちかごろ 長野ながの地下壕ちかごうを訪ねる、戦後せんご掘出した岩石がんせきを横浜よこはま復興ふっこうと厚木あつぎ飛行場ひこうに運んだ
と聞き吃驚びっくりした。

敗戦じやうせん直後じやうご 情報じやうほうが混乱こんらんして、同志どうしと相談そうだん、焼やき米こめをつくり 馬うまに背負せおわせて、女
子供こどもを箱根はこねに逃にげそうと真剣しんけんに相談そうだん、男おとこはヤスリをナイフに改造かざいしたり、青年学
校けいこうの銃剣じゆうけんを研とぎ磨みがいて、若者わかしよは戦いくう相談そうだんした。敗くれた経験けいけんがないので、国くにが天
皇てんがどうなるか、判しらぬ状態じやうたいは働いく意思いしも失うってしまった。一番いちばん情なさけけないのは、
戦没者せんぼつしゃの家族かぞだ、昨日けふまでは愛国あいこくの家いえと崇あがめられ、戦後せんごは無駄死むだじになつたと言
われ、察しするに余あまりある状態じやうたいだ、これから先ま読よめない日々ひびが続つき誰も予想よそうがつか
ない。農家のうかには疎開そかい家族かぞが多おほかつたが町まちは焼やけ野原のほら、帰かえるに帰かえれずこまつて
いた。先祖せんぞや戦死せんじした英霊えいれいの帰かえるお盆ぼんの日に、奇くしくも、経験けいけんした事ことのない
無条件降伏むじょうけんこうふくにより日本にっぽんが貪底たんそこに落おちた暑あつい日ひだった。
戦後せんご稲田いなだの里らに乱舞らんぶするホタルに、無念むねんの思おもいで異国いこくに消くえた さ迷まよえる魂たまに思
え先輩せんぱいを連想れんそうした里らは今いまはない。平和へいの尊たかさは無念むねんの礎いしずえ から生まれうまれた事ことを忘
れてはならない。

故郷

集落が無くなつてから 故郷の言葉に 思い出がましてきた
故郷を離れた事もなく 自然の恵みに囲まれていた
人間 生まれ故郷が無い人はいない だが無い人が集団で現れた
全集落 区画整理で理没してしまつた 北山田

移り住み 何百年と築き伝えてきた 思い遣り
草屋根を守り 生活を支えた屋敷林 先祖が植えた柿の木
山里深く 耕かされた田畑 代々の汗が染みている
山鍬で轍跡を補修しながら 山裾を這うように続く野良道

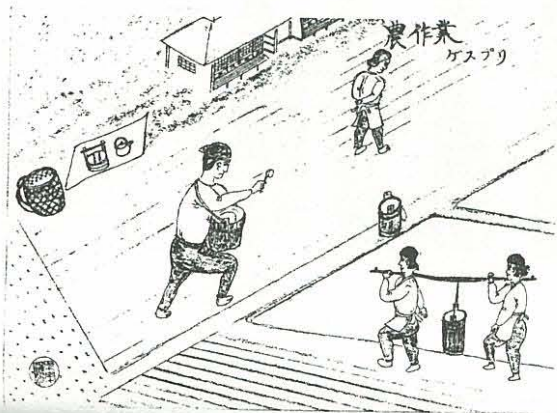
四季を教えてくれた雑木林 動物の屋敷林だつた
新芽で種を蒔き 新緑で苗を植え 初夏で麦を刈り
汗が滲む濃い緑は 土用の田草取り 夏野菜の最盛期
紅葉が始まると 落日早い稲刈りと秋野菜の種蒔き
紅葉が終わる頃 椎茸の ほだ木の伐採を学び

落葉が終わる頃 燃料の薪作りと 落ち葉の堆肥作り
早春の雑木林に、今年の新芽が早いから 種を蒔くかと
雑木林は天然の貯水ダム 雪が多ければ豊作だつた
一滴の水も漏らさぬと土手を、見回り育てた稲田
エビ蟹に 土手に穴を開けられ 一夜で田圃の水は空つぽ
一鍬一鍬 丹念に耕し 農は土作りと 豊かな野菜畑

春 夏 秋 冬野菜 何でも栽培できた
東京 川崎 横浜市場は近く野菜の生産拠点だつた
朝露 夜星の労働時間 15時間有に超えていた
清水の小川 手ですくい飲んで 鰻と格闘したが負けた
苔むした 重厚な草屋根の傍には 柿の大木必ずあつた

先祖が 貧乏しても 柿を食べて飢えを凌ぎ
余裕ができれば 生活の足しになると 有難い生活の知恵
柿の木から 猿顔負けの 鬼ごっこで 落ちて接骨院
痛いうえに 物入りと 親父にどやされた
学校から妹二人帰り リヤカ——で接骨院通い

筵を引いて 女の子は柿の葉で 飯事遊び
藁囲いの日向ボツ子で時間を忘れて子守と お手玉遊び
北風遮る 藁の温もりは 夕日が早かつた
小学校は4キロ 人家もない 山畑ふたつ超えて
学校帰り麦畑の作間から そつと 子タヌキの見送り



カバンずらして 振り返ったら 未だ見ていた

帰ったら誰もいない ノコギリを使って見たくて

納屋からソツト持ち出し 裏の木を切ったら良く切れた

親父が記念に植えた木 怒らぬ親父が恐ろしくて

夕飯は喉も通らず、母が もう悪戯するなよ お食べと

子供は労働力 学校から帰ると 手桶を引きずりながら

風呂場と勝手の水汲み 風呂焚き わずかな時間で遊ぶ

朝縁側の雑巾がけは冷たかった 拭いたらすぐ凍る

親の目を盗み遊びすぎて、風呂焚き忘れて大目玉

宿題は二の次 夜 針仕事の母の横で 鉛筆が居眠り

忙しき昼間の汗がひく宵は 音一つしない静寂の世界

果てしない星空に ホタルが流れ 月が透きとおっていた

ホタルが休む頃 ブッポウソウが 幽玄の森から

寂しそうに鳴く 友を送り 家路に急ぐ頃

月に導かれた肥車の轍音 砂利道に遠く聞こえ

寝ずに働く農夫 送りだした農家の明かりは消えない

遠い親戚より近くの他人 祝言 不祝儀 我が事のように

喜びを分かち 悲しさに共に涙した 思い遣りの故郷

部落から 働き盛りの若者が 戦地に送られて行った

20歳で兵隊検査 甲種 第一乙種 第二乙種 丙種に分けられ

プライバシイも 人権も無い あるのは命令だけ

4代後半も 泳げなくても海軍 陸軍に召集

86戸で 60人 召集令状で戦地へ 24人戦死した

富士の桜が咲いたかな 故郷偲んだ 軍事便

先輩が 臉に画いた便りの故郷は 今は無い

苦渋の選択者は諦めるが、思い遣りある里にしなければ

守り育ててくれた先祖 戦死した先輩に申し訳ない

テレビの歌謡唱で必ず 故郷偲ぶメロデーが流れる

うさぎ追いかの山 小鮒釣りしかの川

童謡の赤とんぼ 葬儀でも 出棺の葬送曲は故郷のメロデーが流れる

望郷の幼き世界に 帰った故人に重なり 涙が滲む

故郷ある人は幸せ 埋まった故郷は記憶にしかない

思い遣りの凝縮が故郷 貧しくても 辛くても

人の道を自然と教えてくれた 暖かい 思い遣り

新しい故郷は 思い遣り 或る故郷が必ずできる

誤字乱文多謝 男全富雄



出征〔六十年前のニューウタン〕

召集令状 赤い一枚の紙 命は託された

〇〇日 〇〇師団 〇〇連隊に入隊せよ 入隊日から自由はない

近所から召集令状 おめでとう御座いますと 儀礼的挨拶

そして家族に困ったら何でも相談してと 逃げるようにして帰る

戦に行く身には戦死か 生還か 二つしかないから

入隊日 山田富士の麓にある集会所の庭で

村中集まって壮行会 村の長の激励の挨拶

兵士は悲壮な顔で 元気で行ってまいります 留守中家族をお願い致します

戦況好転せぬ中 これが最後かもしれんと 目が語っていた

勝ってくるぞと勇ましく 後輩が歌う軍歌に送られ

村境までの砂利道 再度踏めぬかも知れぬ道を 兵士は無言で

故郷を 我が家を振り返り 振り返り召されて行った

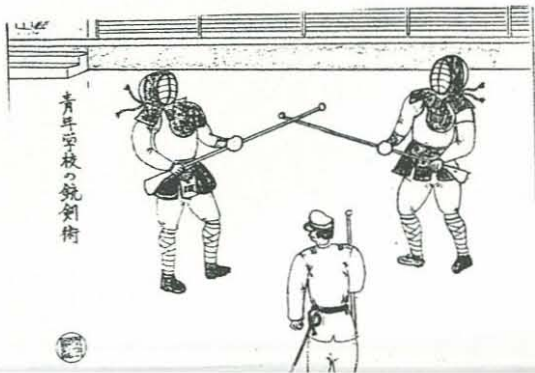
列の最後に 妻が 子供を背負い 手を引き 諭しながら

夫に最後に渡す おにぎりを 風呂敷に包み

汗か 涙を拭きながら 乾いた村道を 遅れまいとついていく

願ひ空しく 白木の箱で無言の帰還 若い人生悔やみが残る

平和は尊いが 運命と時代に感謝する



誰だれもが新住民しんじゅうみん

都筑区じようもんの縄文時代じよもんの前だれは 誰だれも住んで居なかつた 山川

何いずれからか 住まいを求め 移り住んできた住民

貴方も 私も 先代せんだいは何れからか 移り住んできた

昨日きのう 昨年 一昨年 移り住んできた人も

先代が 先代が移り住んできた人も 住めば都と

みんな 同じ思いで 安住あんじゆうの地を此処ここに定めた

先も 後も 昔は争つてご挨拶あいさつ 今は気位きぐわいが邪魔じやまになる

他人たにんの お世話せわにならず 人生は送れない

お世話せわになったら お世話しなければ 人生の証がない

仲良く住む 簡単かんたんな事が 出来ない方もいる

差別さべつと 虚栄心きよえいしんが住みよい町を 遠くしている

皆んな 年代の差はあれ 移り住んできた新住民しんじゅうみん

健康けんこうは 何よりも大事に 一日を大切に 住みたいが

心の病は 妬みねた 僻みひが 憎しみにくから感染かんせんする

治療ちりょうは 相手の理解りかいと 信頼しんらいから全快ぜんかいする

人生二度と合えない現世げんせ 移り住んできた者どうし

責任と信頼を念頭ねんとうに 笑顔しょうがいで生涯送りたい



はてしなき 遙かなる道

十人十色

十人十色 良く聞く言葉だが??

当たり前の 現実の社会 すべては他人

人 其々思いは異なる、色に例えて十人十色

どんな名画でも 十色を混じり合わせて 描かれる

原色は、信ずる奇麗さと 労わりにある

混色は、我慢と耐える 思い遣りがある

原色 混色 混じり合わせて 画が描かれる

組織も 新旧 混じり合わせて 相手を尊重すれば

描かれるような 住みよい町になる

絵の具は地域 描くのは貴方 個性の強い色もある

原色と混色は 貴方と私 額縁は組織

素晴らしい故郷を描こう 都筑のキャンバスに

十人十色の結集が 地下鉄四号線開通

十人十色の歴史が 開港百五十周年

街づくりは 十人十色 平等の融合が基本

貴方も 私も 大事な絵の具 親しまれる色になりたい

横浜の額縁に 都筑を描こう 十人十色で



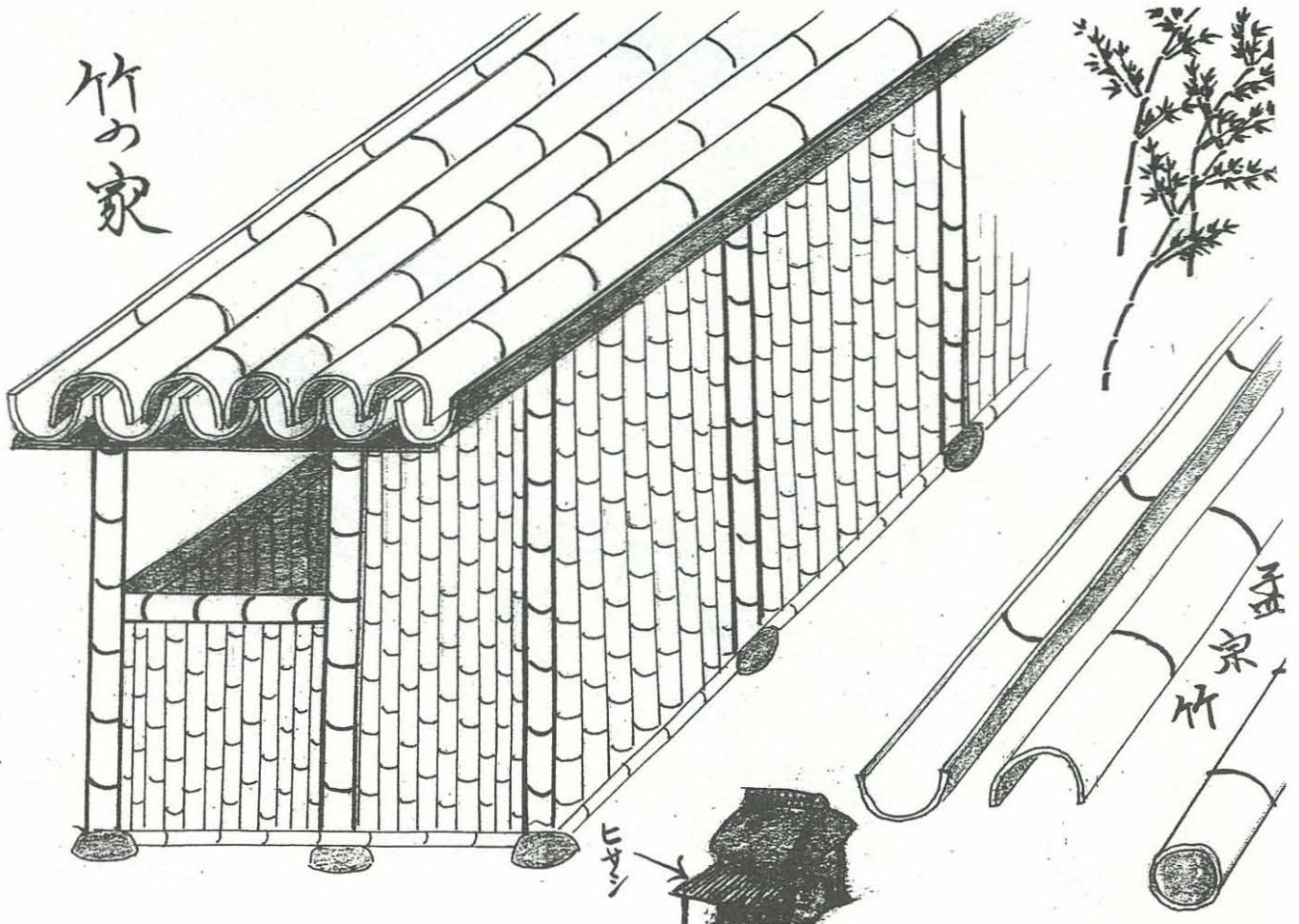
孟宗竹

竹の中では日本では孟宗竹は最大の竹です。都筑では特に中川地区は特産地です。孟宗竹の栽培地を竹藪と呼ばれており、農家の屋敷には竹藪が栽培されている農家が多かったです。竹藪の栽培面積が広い程、収入が多かったようです。孟宗竹の栽培は大変な手間がかかります、収穫が終わり6月頃から9月頃まで、根埋け作業を行います、竹の根を地上に出てくる良い根を、30センチ位掘り下げて埋め、悪い根は切り出す仕事です、1番伏せ、2番伏せ、3番伏せ、と新しく出てくる根を伏せこむのです。農家は稲作、夏野菜等忙しいので、竹藪の栽培面積が広い家には、専門の「根埋け職人」、農家を回って居られました。特に「朝掘り竹の子」は有名で市場から引き取りにくる盛況でした。

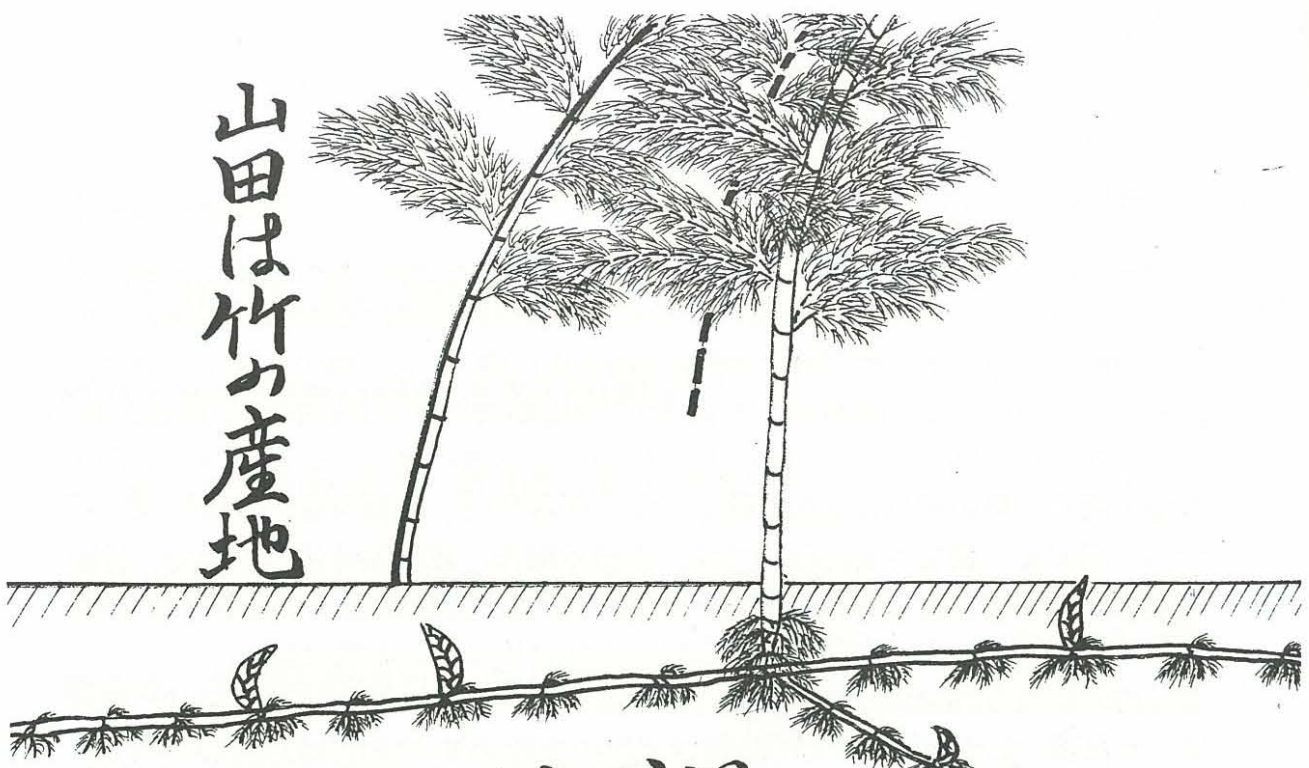
この地に植えられた孟宗竹の起源を辿りますと、諸説頻繁にあります、地名に、元祖藪、江守藪等あります。竹は農家の生活資材 箆等には必要な資源でした、小学校の校章にも使われています、高等科の工作の授業にも竹細工は使われました。戦時中輸送船の甲板に、孟宗竹で筏を組み積み撃沈された時にと 横須賀重砲連隊が北山田に伐採にこられ悲壮な時代でした。戦後竹から箆はプラスチック等に変更 環境汚染にも影響していると感じます。

昔は家のひまじしに竹を使いまじり

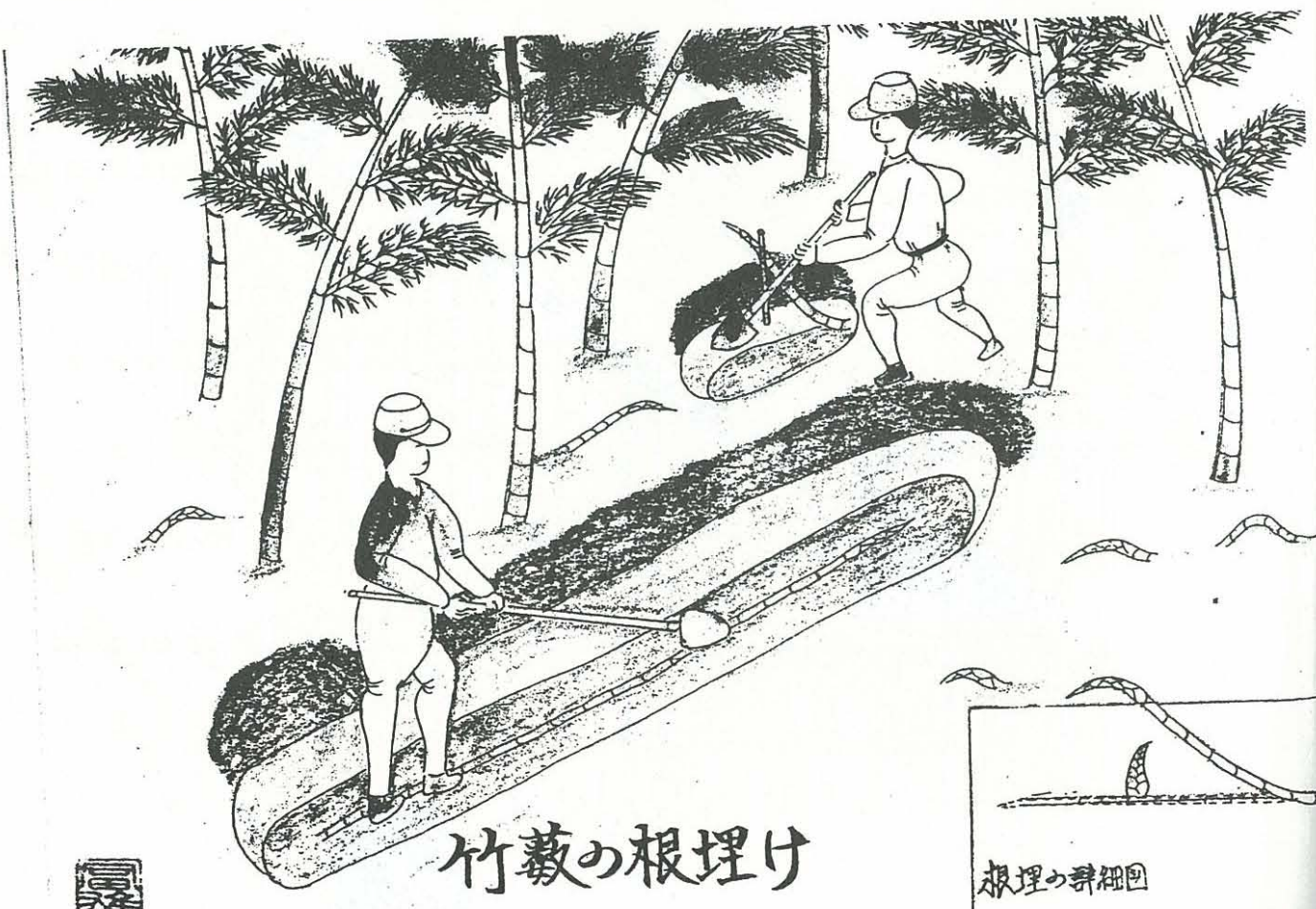
竹の家



山田は竹の産地



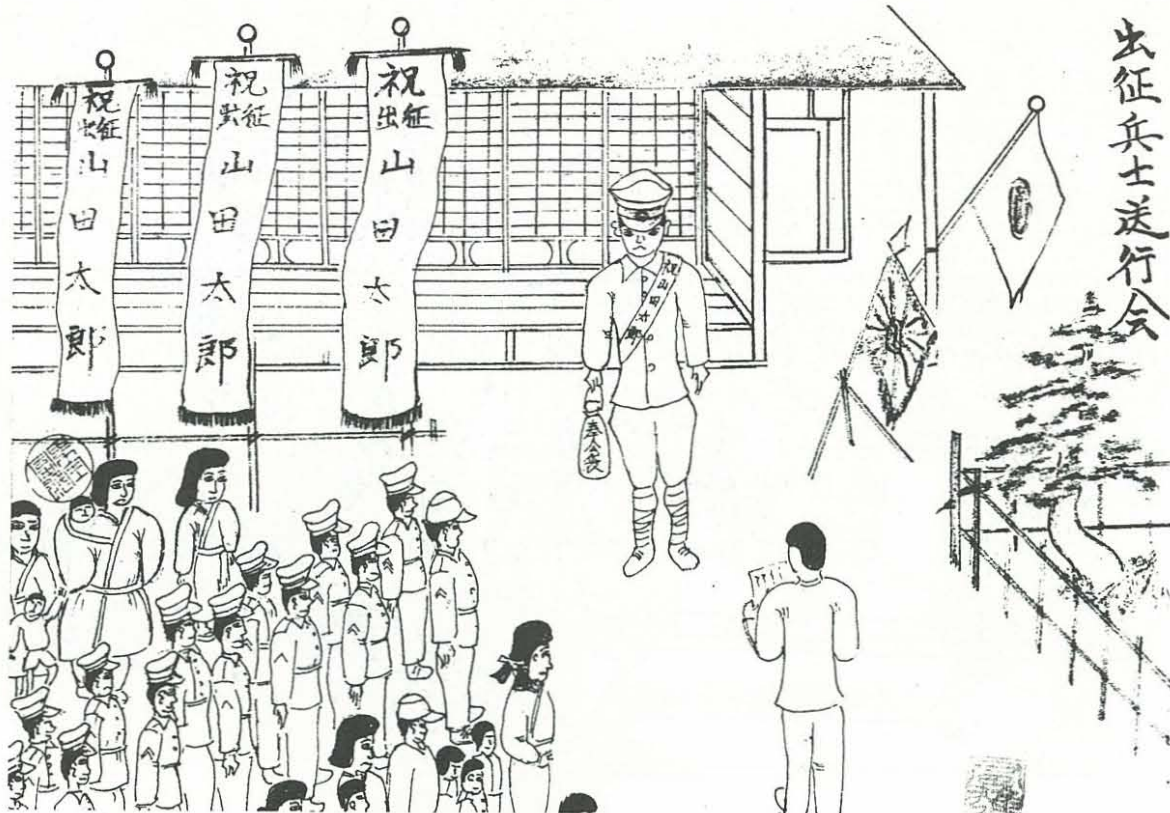
竹藪(畑)の繁殖図



竹藪の根埋け

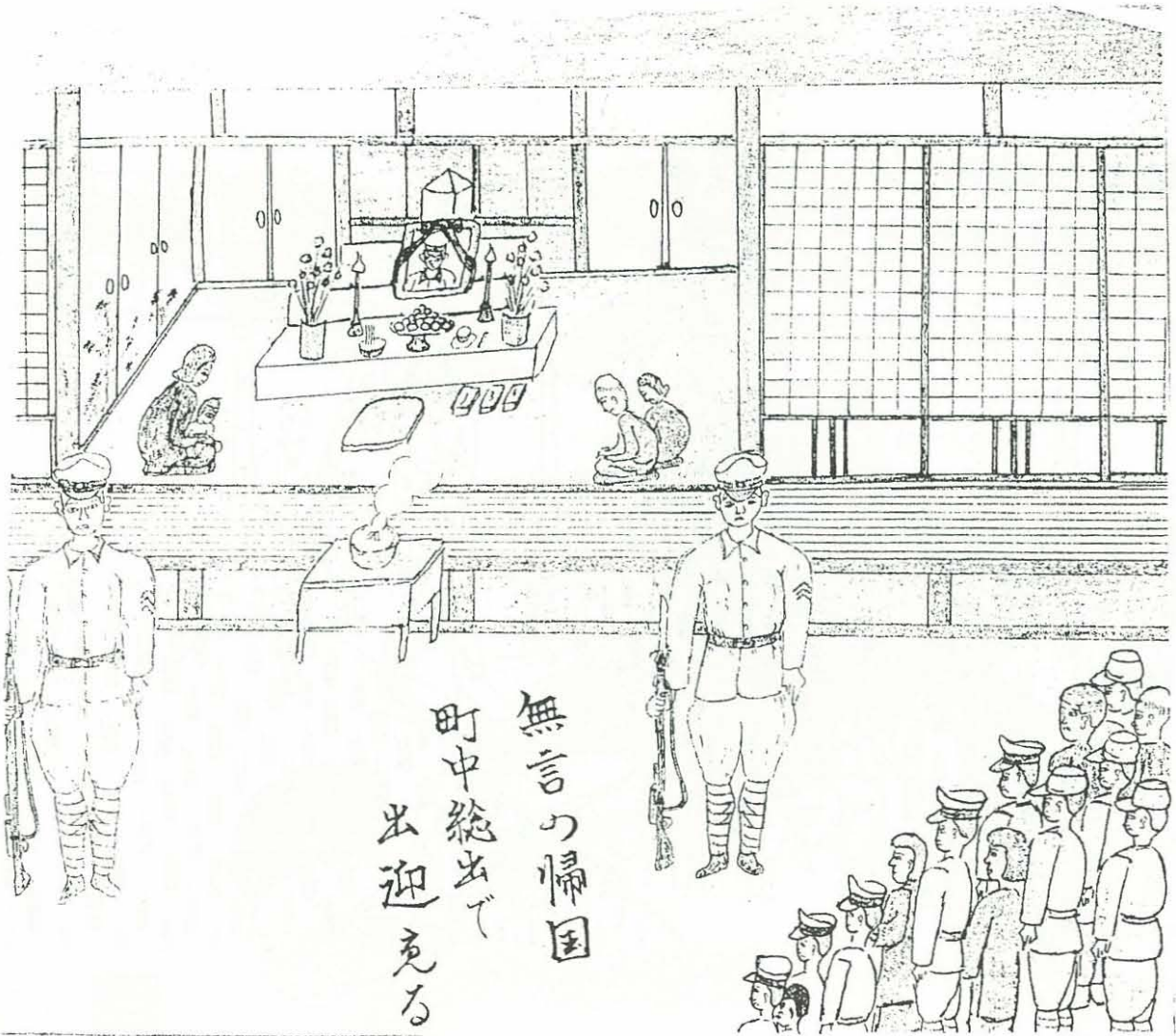
根埋の詳細図

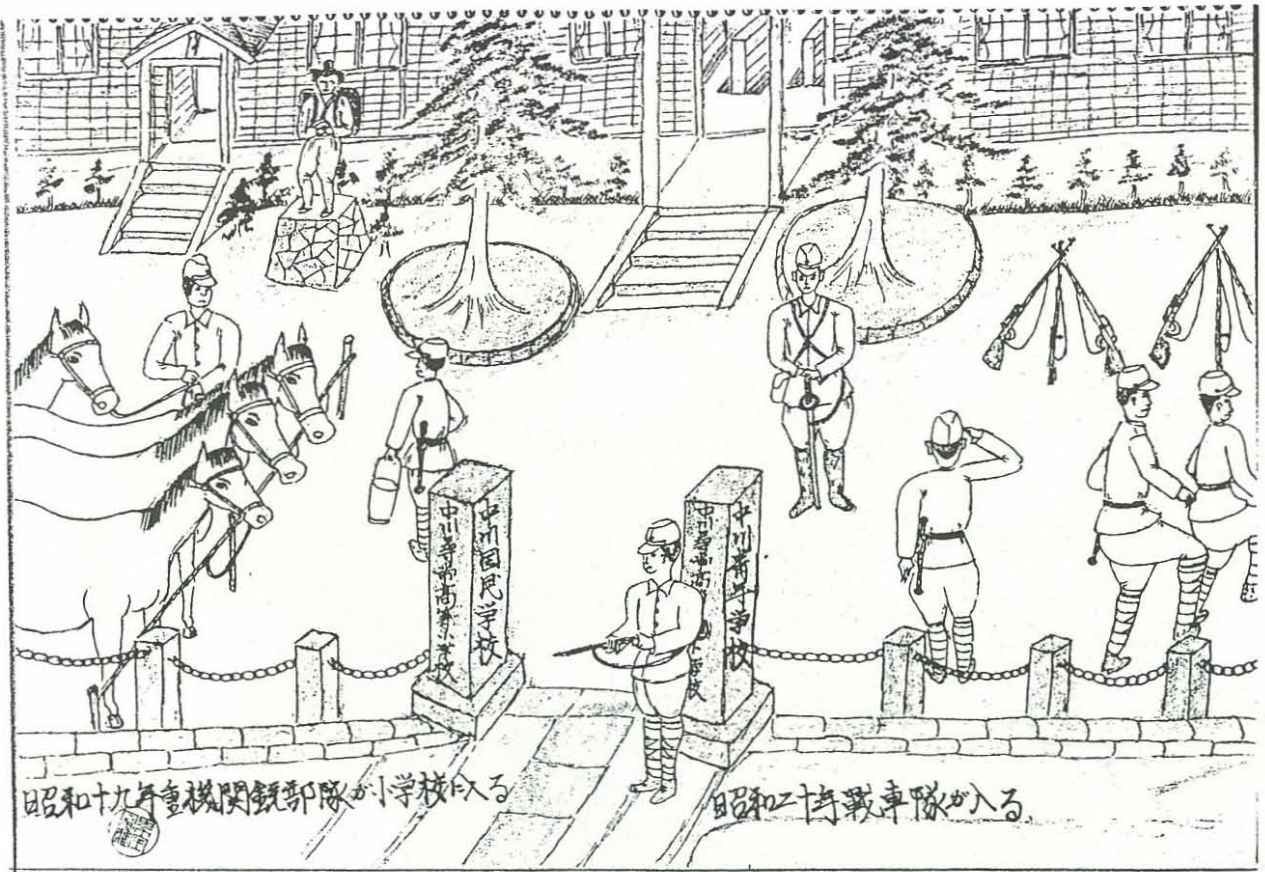




終戦間際招集兵は壮行会は
禁止され夜中極秘で見送り
1名で入隊するよう要請された。

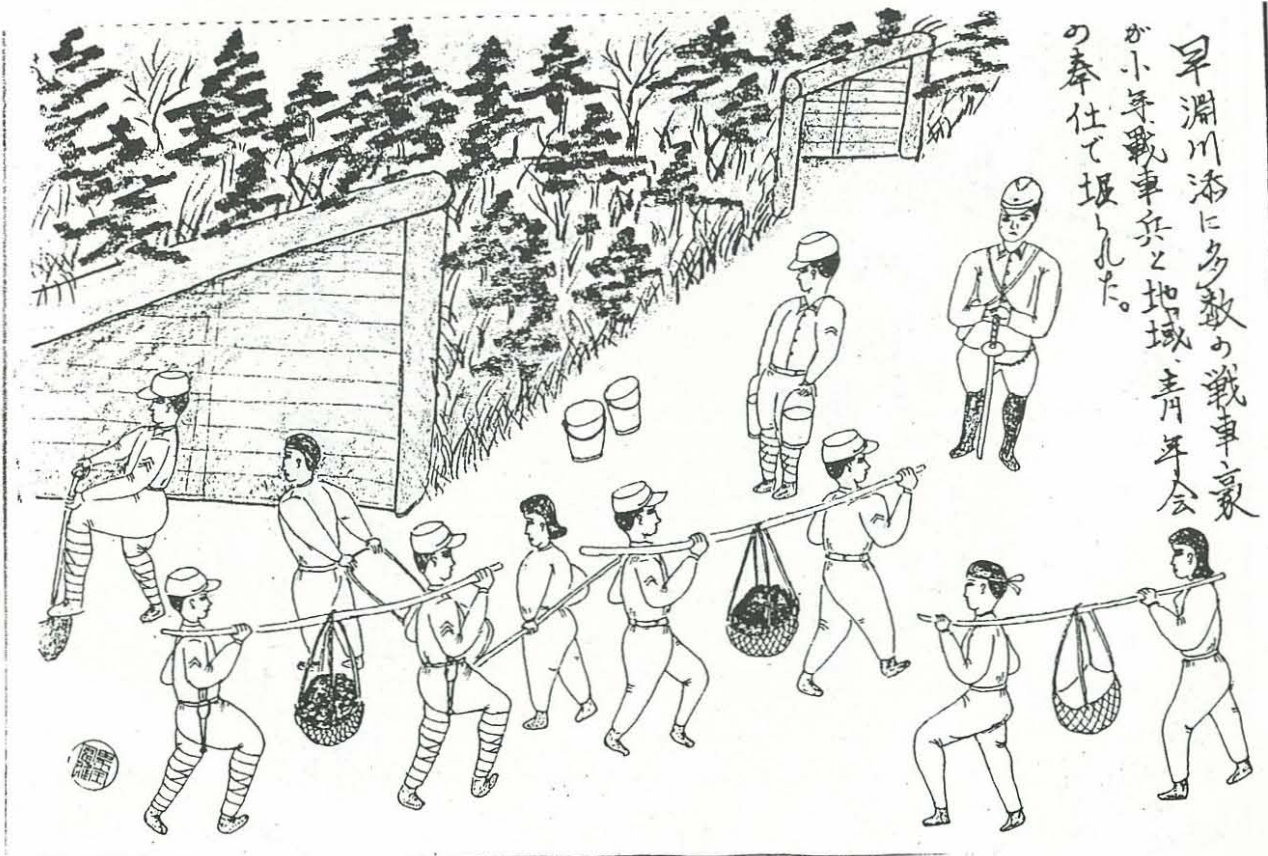






昭和十九年重機関銃部隊が小学校に入る

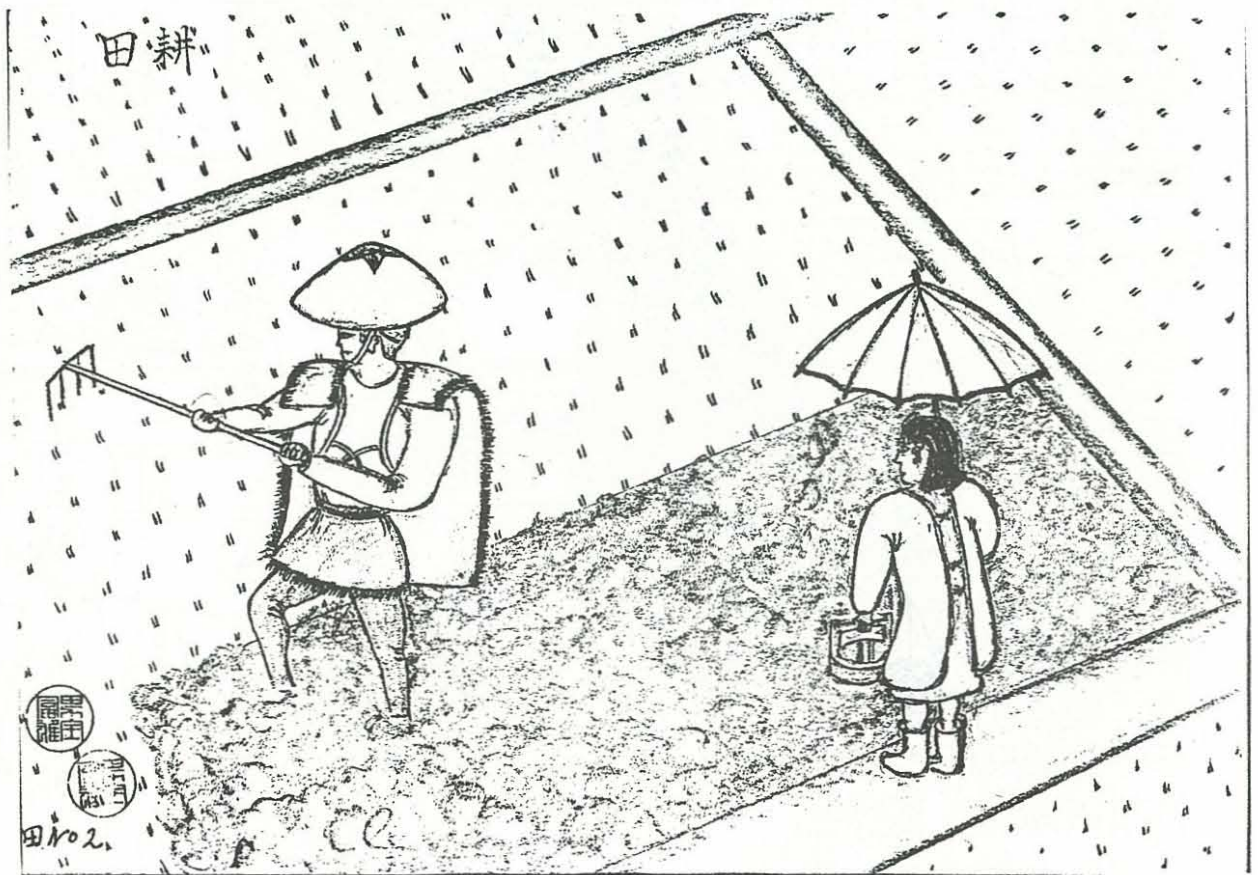
昭和二十一年戦車隊が入る



早淵川添に多数の戦車青年会
が小年戦車兵と地域、青年会
の奉仕で堰くた。



お三時

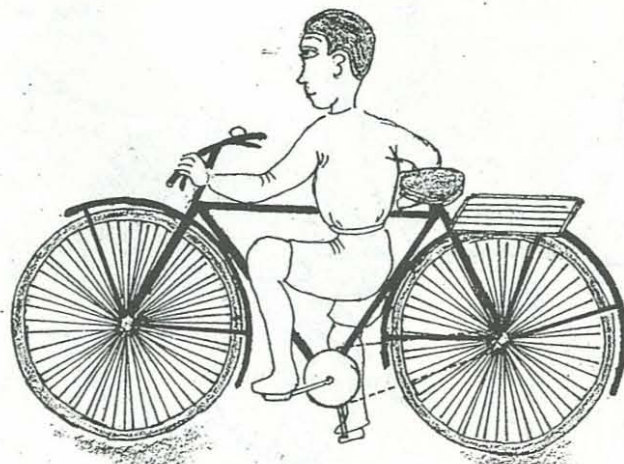
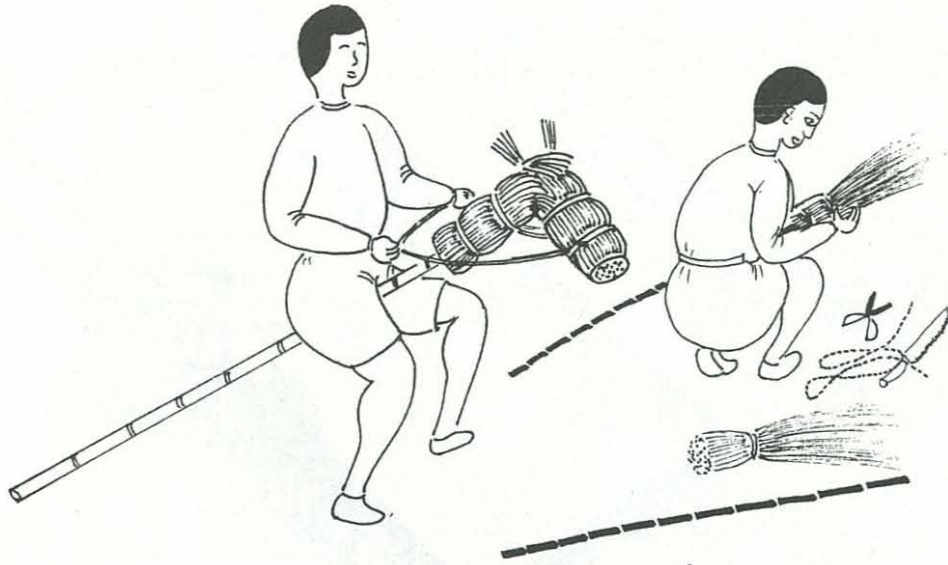


田耕



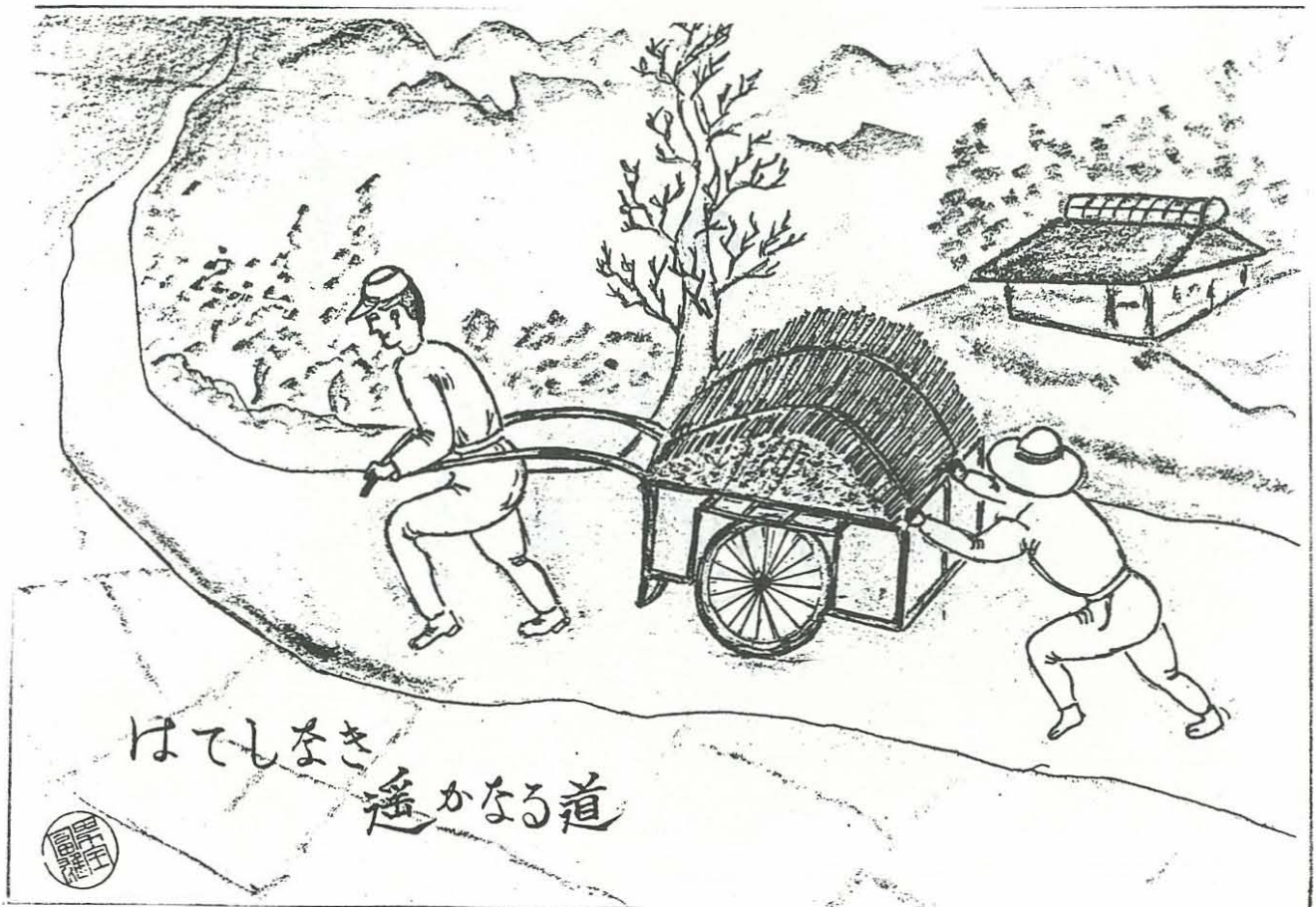
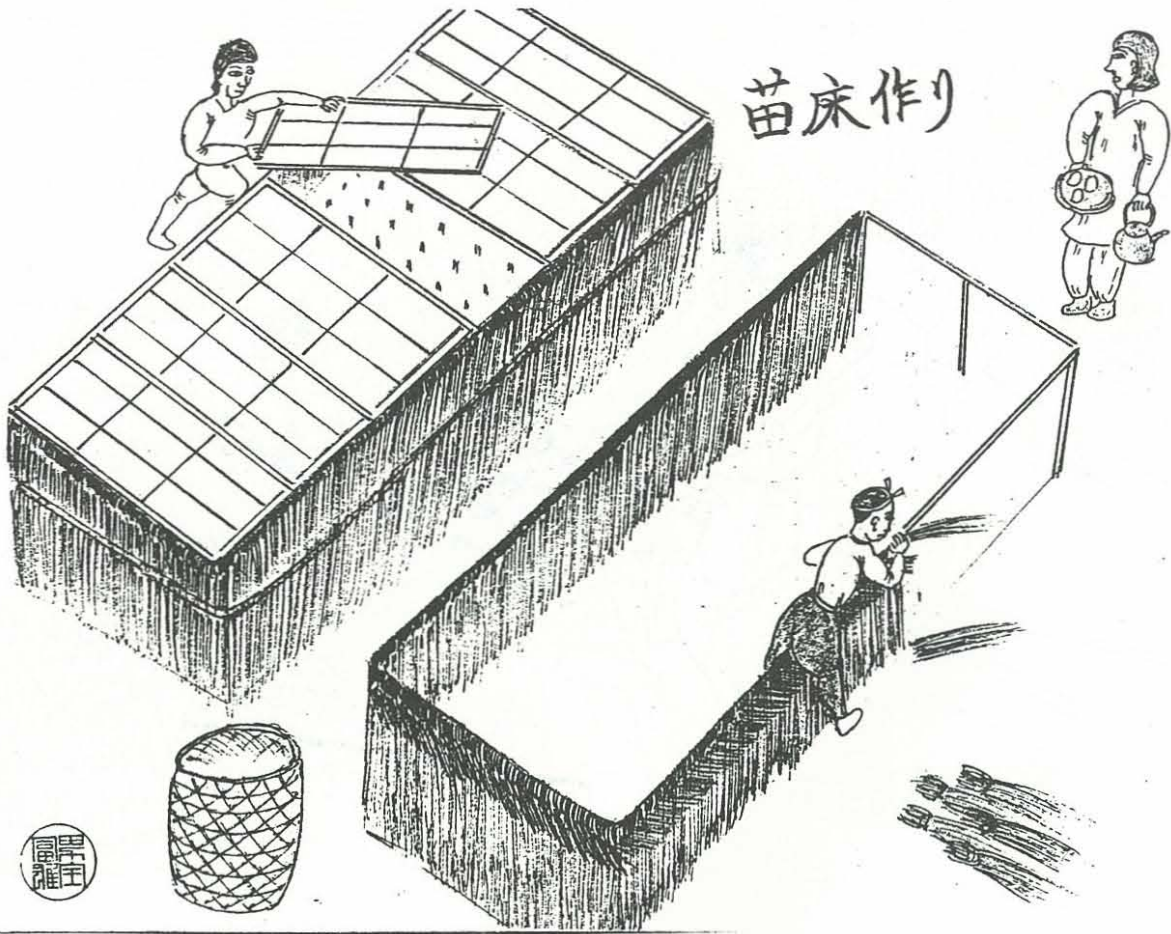
田の2

乗馬遊び

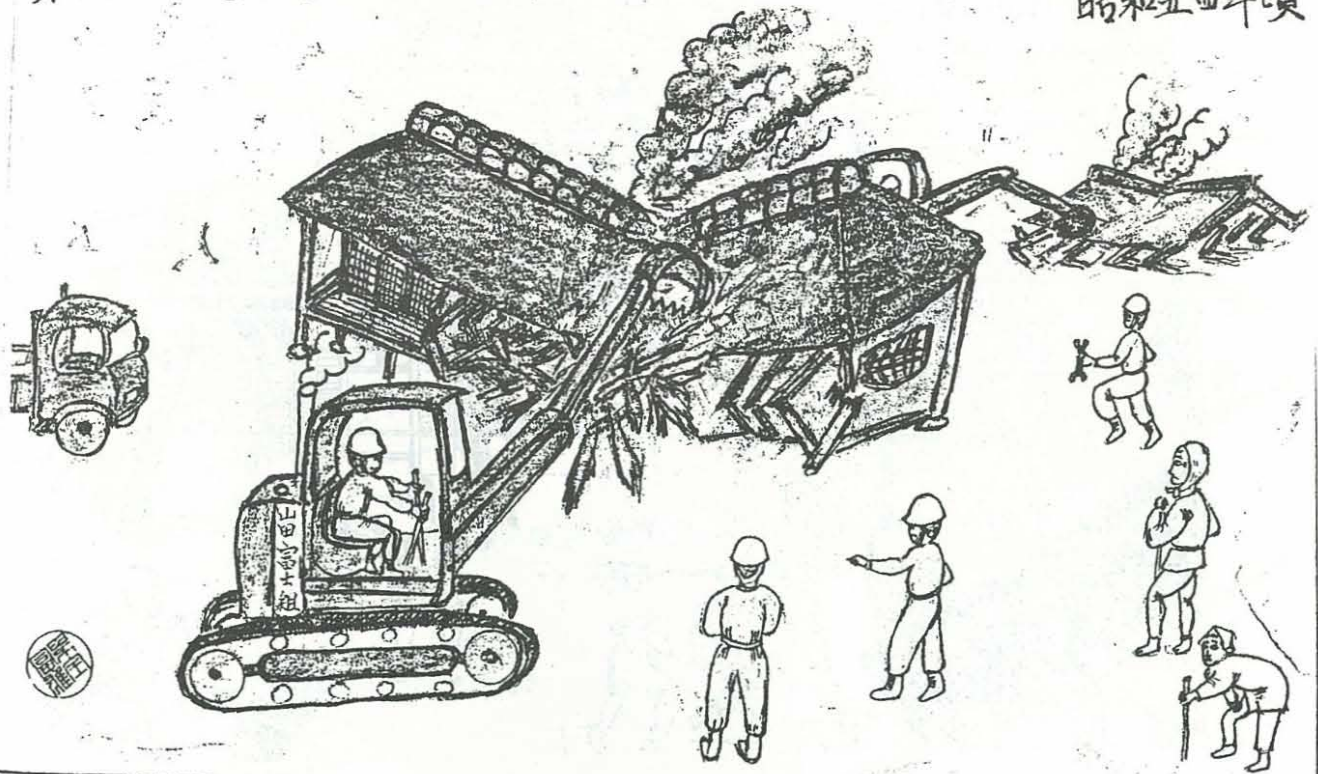


自転車に乗れたぞ
横乗りで



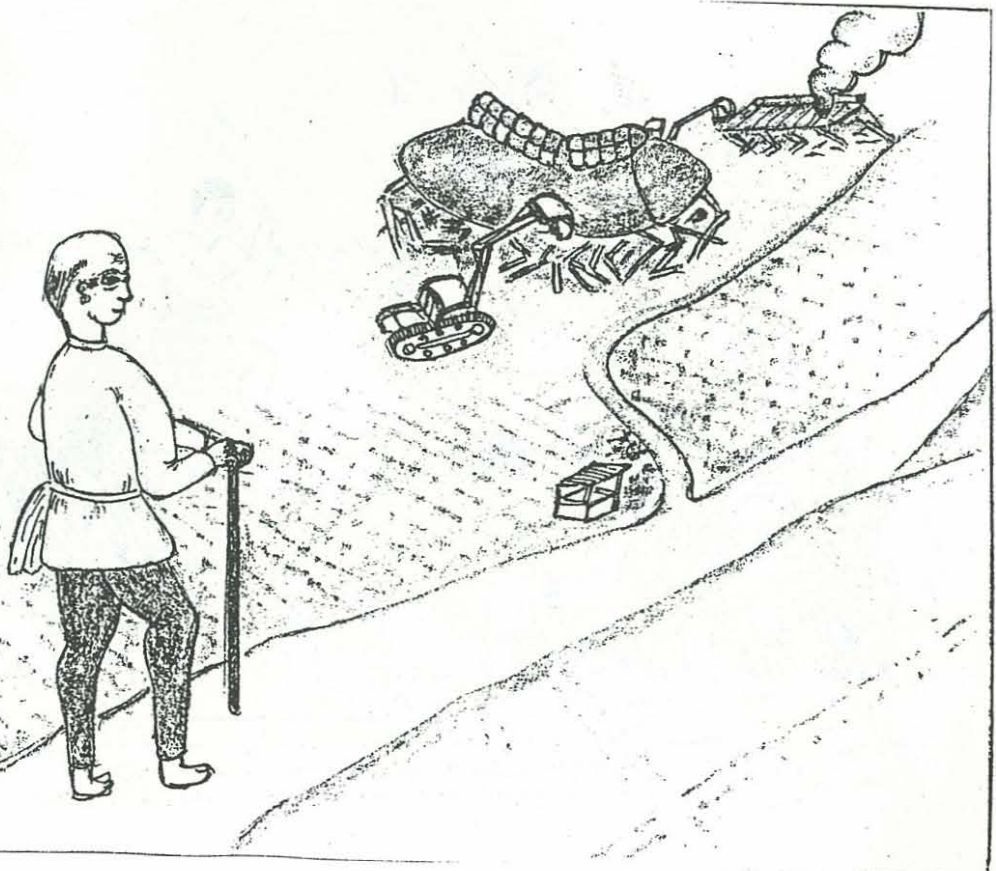


新らしい町作りの為に故郷は自からの手で永遠に老夫婦の前で破壊した
昭和五四年頃



住み良い町を作る為
先祖伝来の家を見納める

老爺

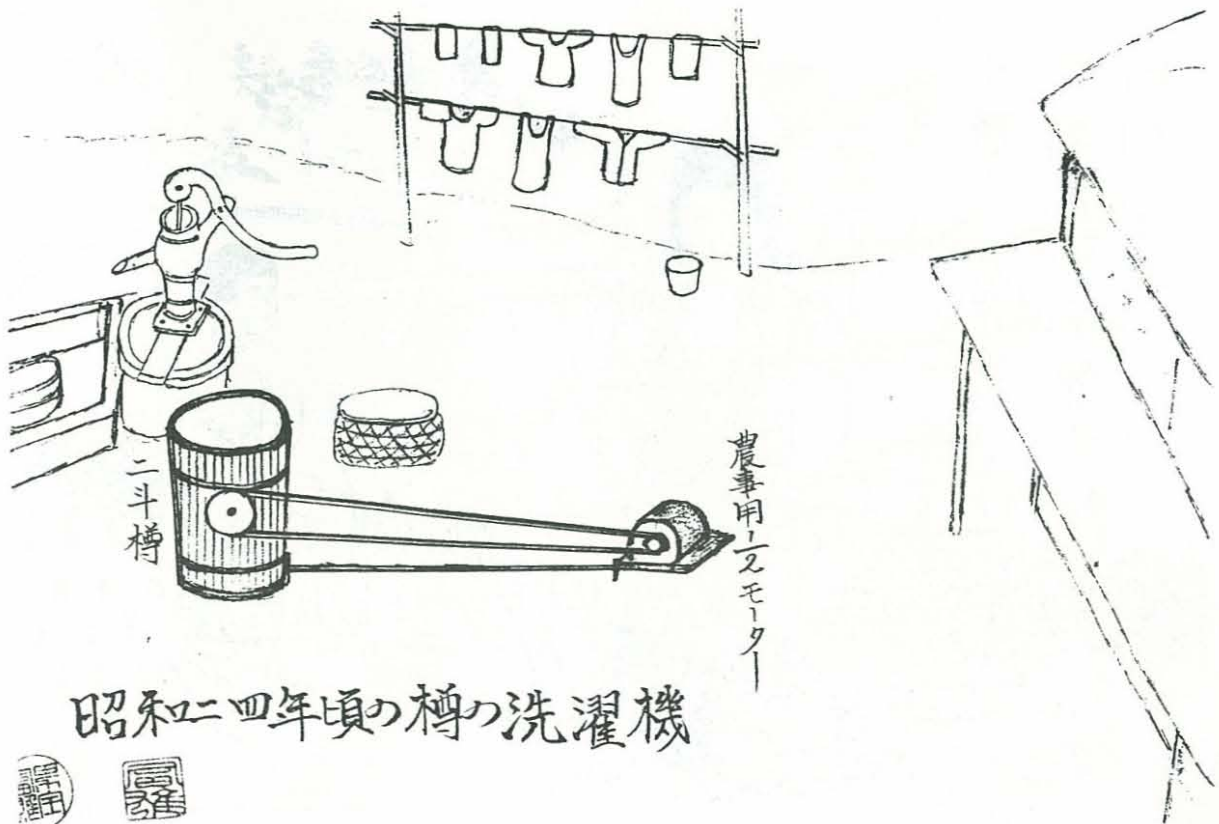


隣近所総て
屋根拭替



道路普請

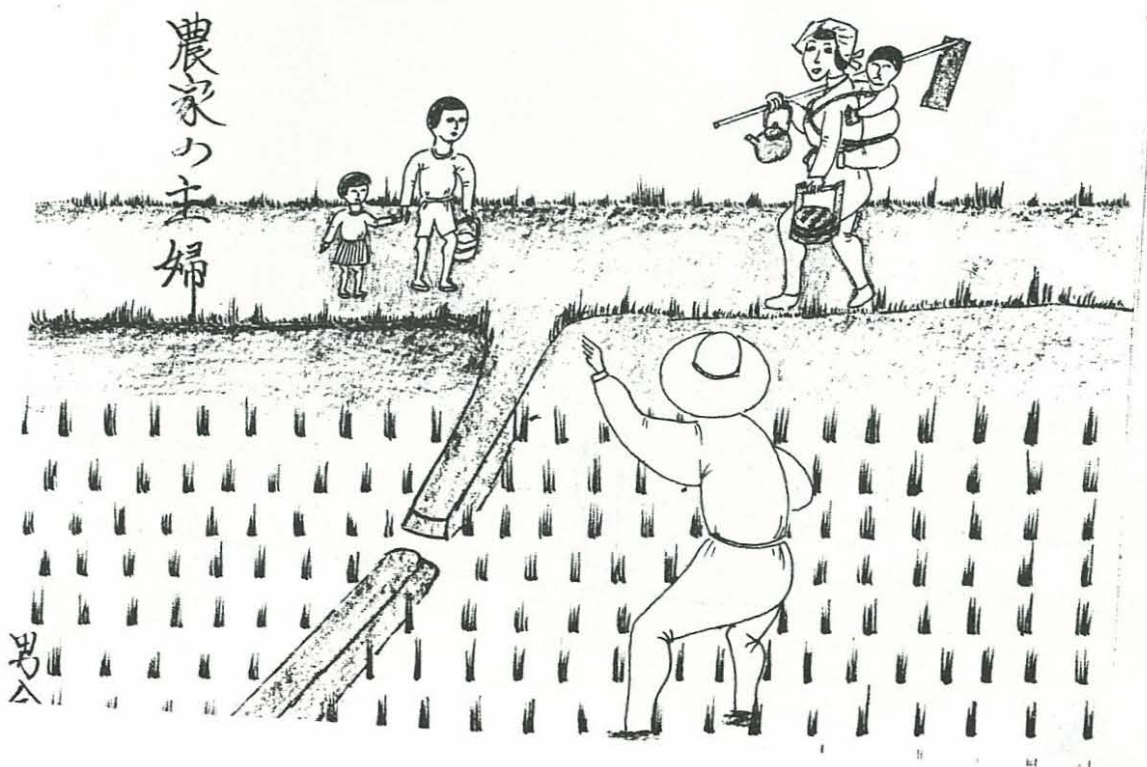
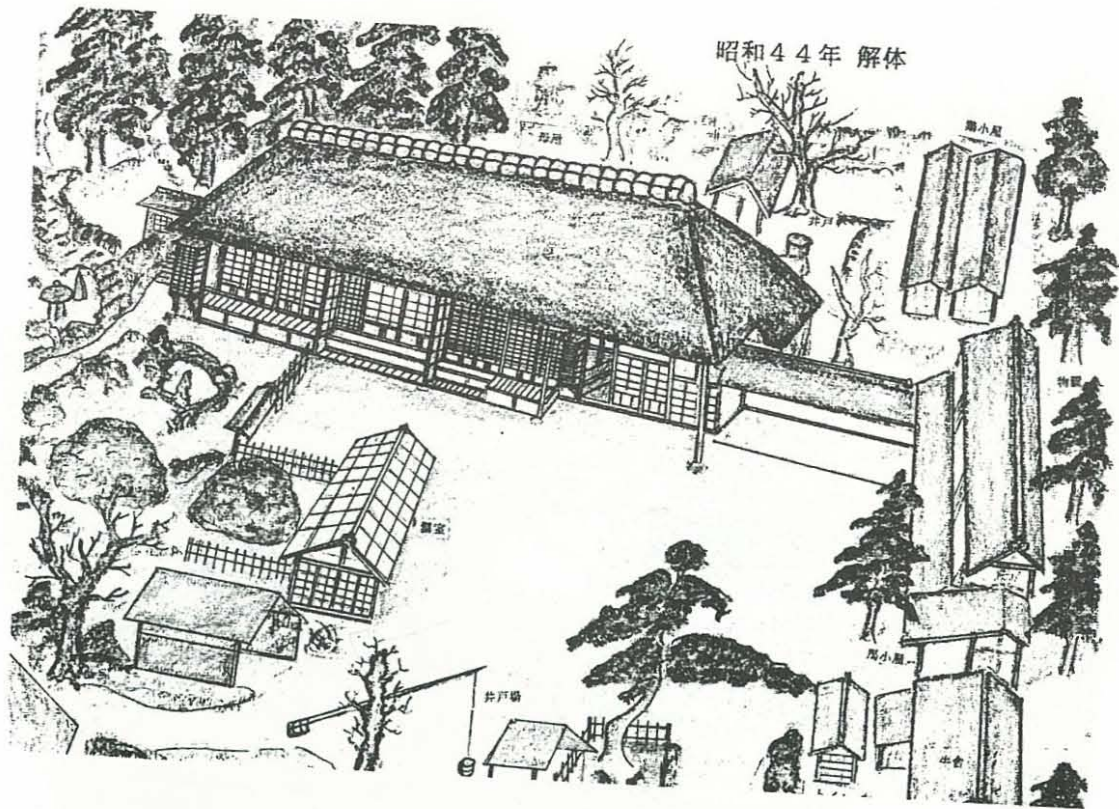




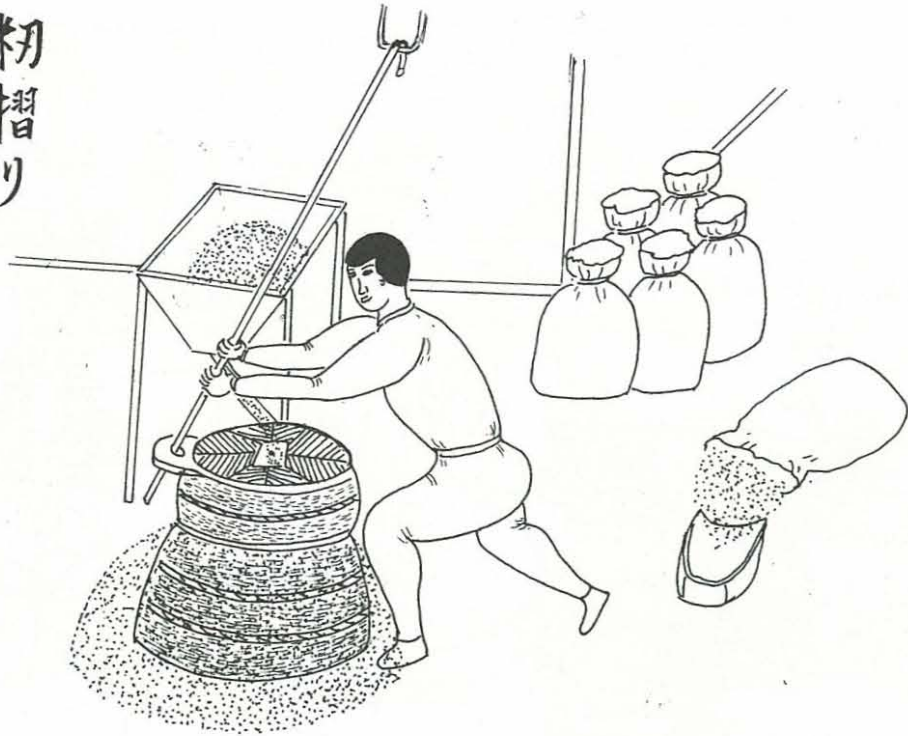
昭和四年頃の樽の洗濯機







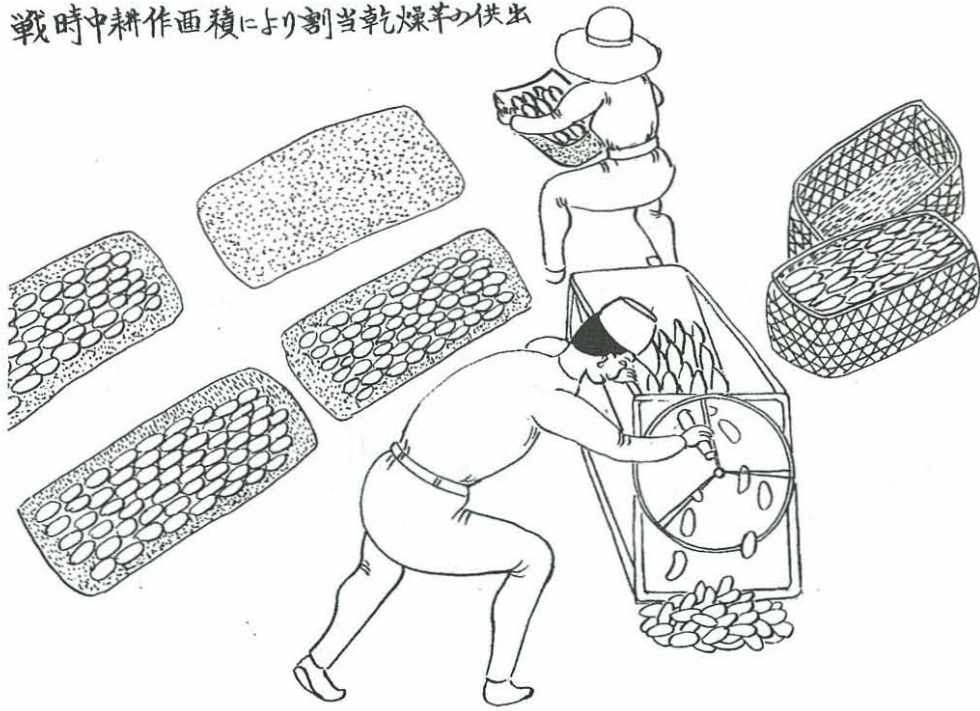
糶摺り



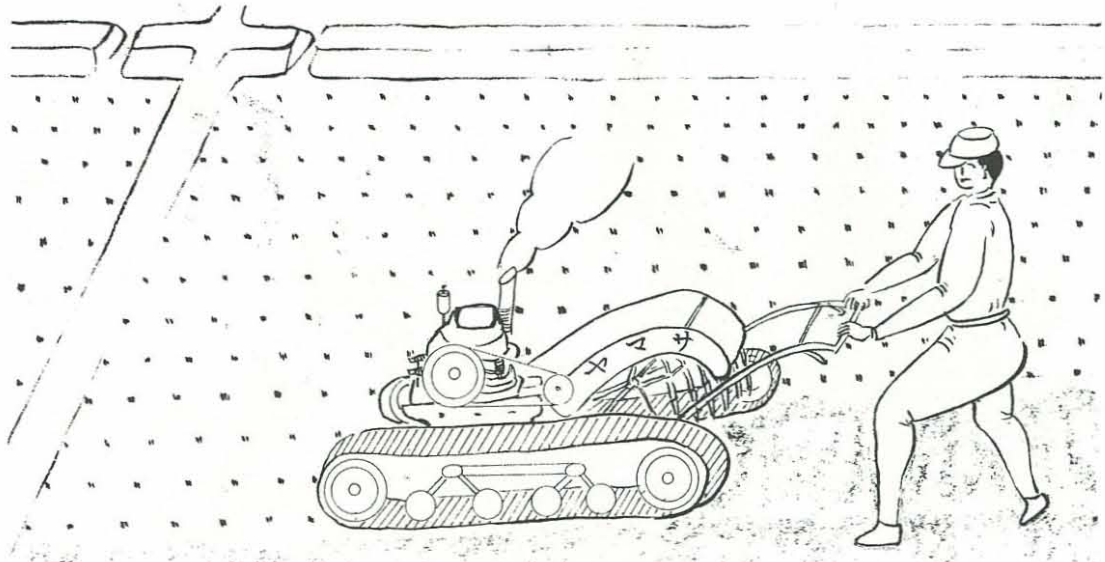
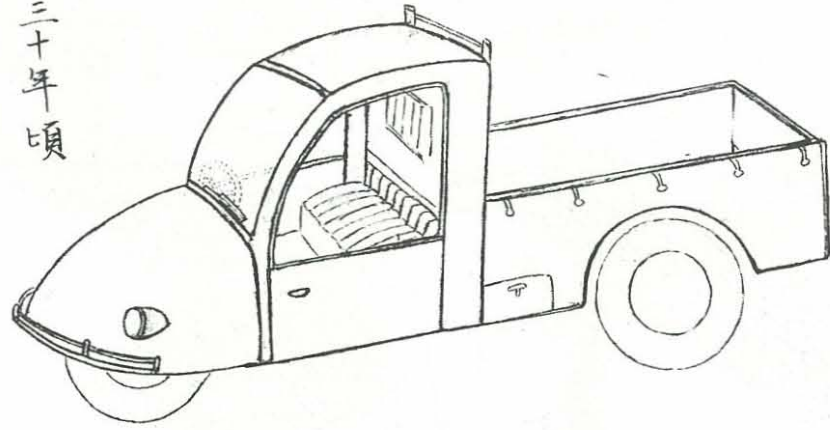
くろめり



戦時中耕作面積により割当乾燥芋の供出



昭和三十年頃
丸ハンドルミゼット
ダイハツ



マサダ耕耘機